

297  
79

297-79  
1200501366552

航海練習所要覽

(自昭和十四年十月二日  
至昭和十五年十月一日)

同所編



始



297  
79

航海練習所要覽

297-79

（自昭和十四年十月二日  
至昭和十五年十月一日）

航海練習所

# 航海練習所要覽

(自昭和十四年十月二日  
至昭和十五年十月二日)

發行所寄贈本

## 目次

	一、一般記事	一
	(一) 沿革	一
	(二) 法規	四
(1)	航海練習所官制	四
(2)	航海練習所規程	五
(3)	航海練習所長職務規程	六
(4)	航海練習所規則	七
(5)	航海練習所練習船々則	一八
(6)	航海練習所練習船乗組備人被服規程	三七



(7) 練習船乘組員航海日當及食卓料支給ノ件 ..... 四四

(三) 練習船 ..... 四五

(1) 練習船要目 ..... 四五

(2) 練習船航海狀況 ..... 四六

(四) 職員 ..... 五〇

(五) 生徒 ..... 五四

(1) 入所生學校別表 ..... 五四

(2) 生徒府縣別表 ..... 五六

(3) 生徒氏名 ..... 五七

(六) 修了者 ..... 六一

(1) 修了者府縣別表 ..... 六一

(2) 修了者氏名 ..... 六二

二、本年度記事 ..... 九六

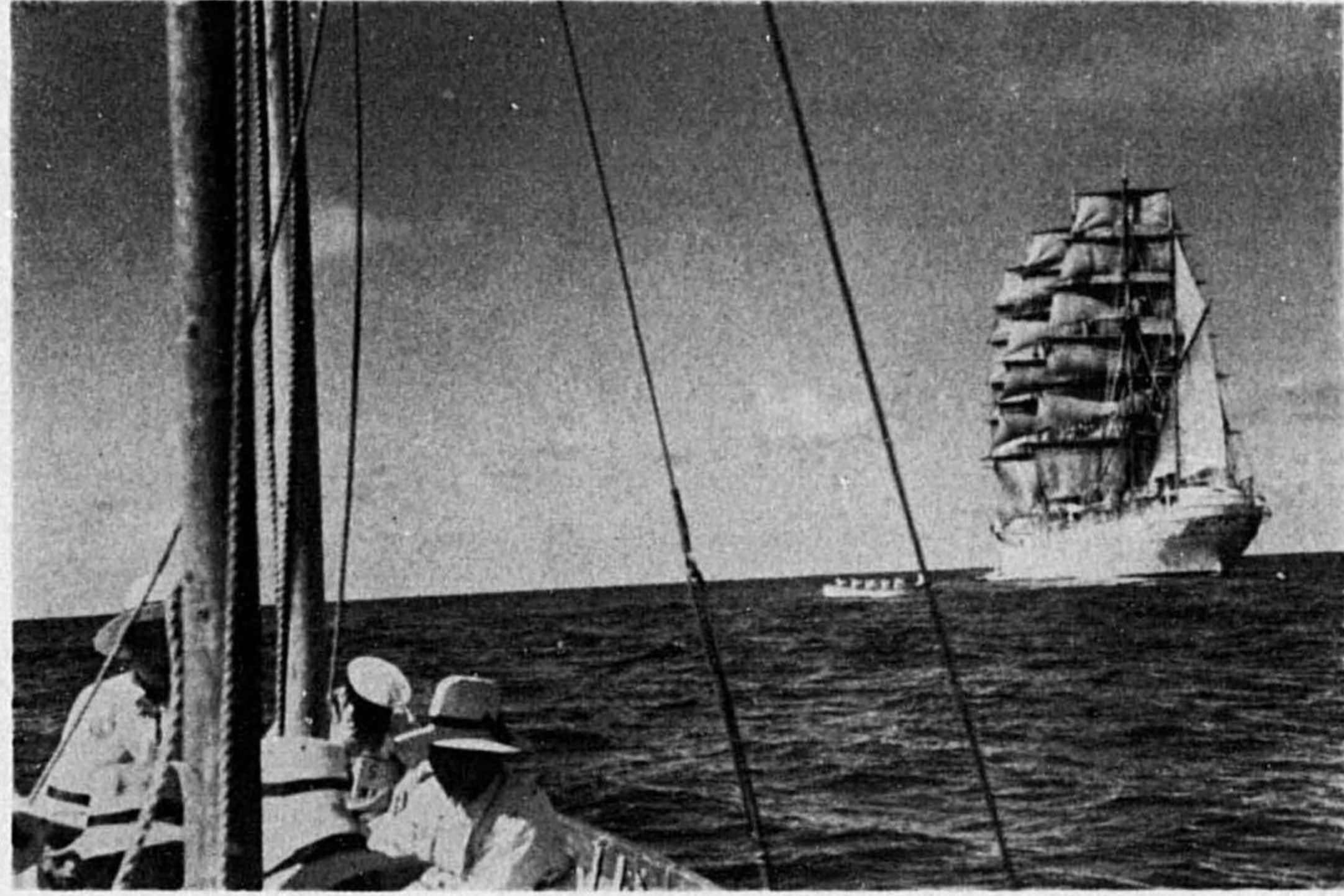
(一) 練習船ノ動靜 ..... 九六

(1) 航海統計 ..... 九六

(2) 航海記事 ..... 九七

(3) 見學並講演 ..... 一〇四

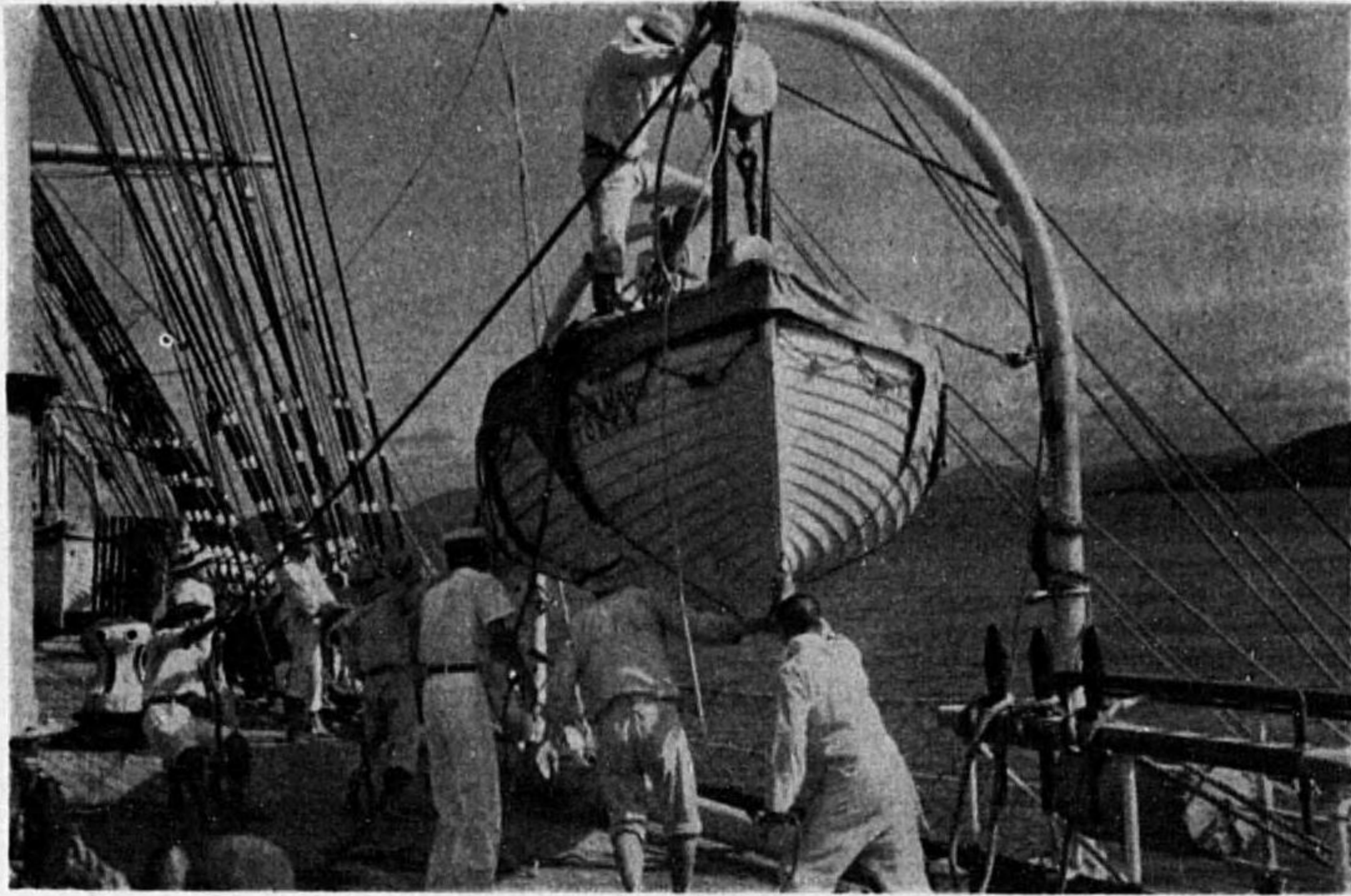
(二) 人事異動其他 ..... 一〇九



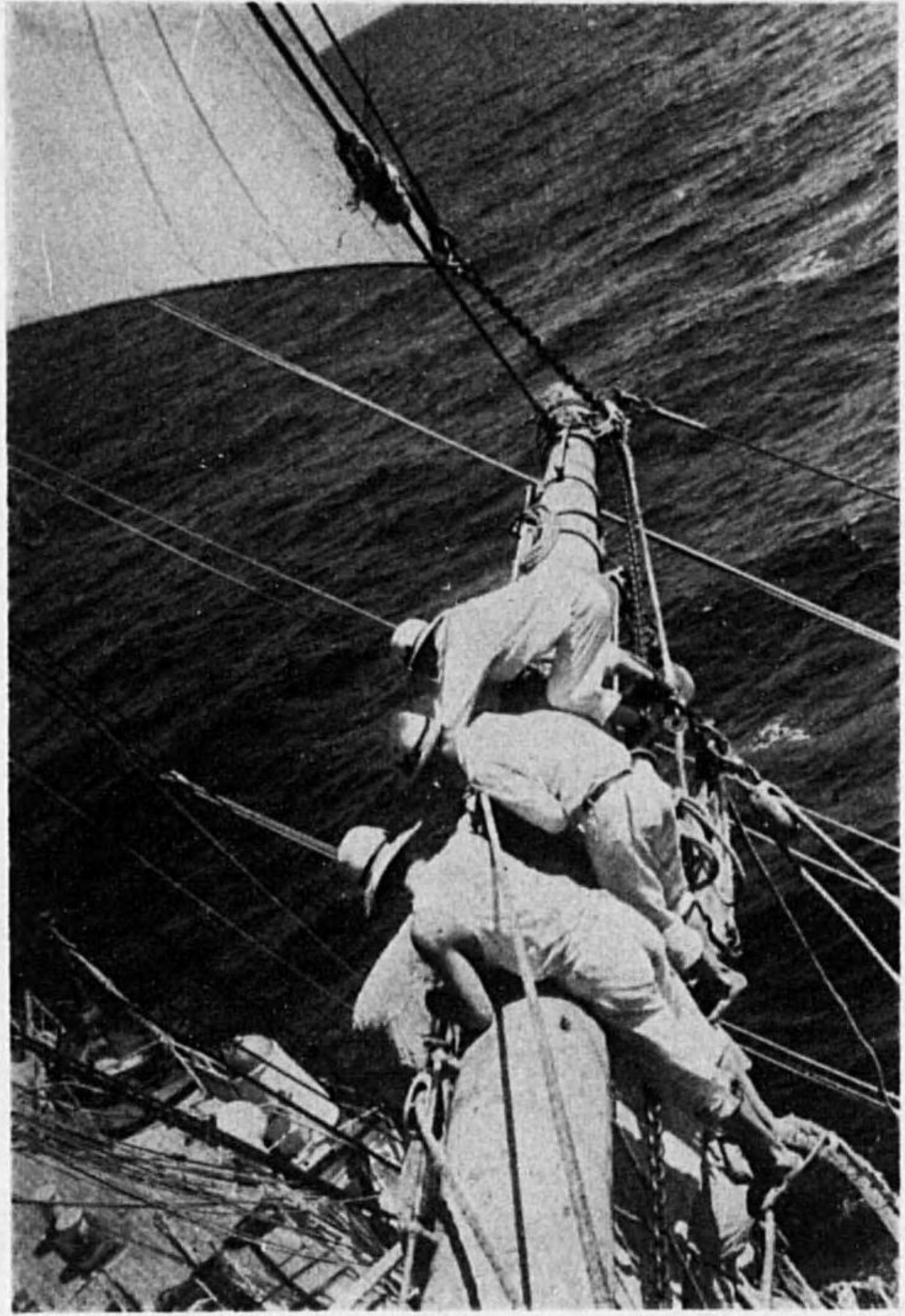
↑南方洋上ニ於ケル溺者救助操練



←溺者救助ニ赴ク救命艇



↑ ポルネオ入港準備



← 洋上ニ於ケル操帆作業

# 航海練習所要覽

## 一、一般記事

革



本所創立當時ノ我邦ニ於ケル商船學校ハ東京及神戸ノ兩高等商船學校並ニ北海道廳立函館商船學校(昭和十年三月廢止)富山縣立商船學校、三重縣立鳥羽商船學校、島根縣立商船水産學校(昭和十一年三月航海科廢止)、岡山縣兒島商船學校、廣島縣立商船學校、山口縣立大島商船學校、香川縣立栗島航海學校、愛媛縣立弓削商船學校、佐賀縣立佐賀商船學校(昭和八年三月廢止)、鹿兒島縣立商船水産學校(昭和七年四月鹿兒島縣立商船學校ト改稱)及大阪府立高等海員學校ノ十二ノ公立商船學校ナリ

右商船學校ノ席上課程終了後練習科課程ニ於ケル生徒ノ航海練習用トシテ東京高等商船學校ニハ練習船大成丸(總噸數二四二三噸四檣バーク型補助機關付帆船)神戸高等商船學校ニハ練習船進徳丸(總噸數二五一八噸四檣バーク型補助機關付帆船)ヲ夫々所有シ生徒訓練ニ好成績ヲ收メ來レリ

然ルニ前記(大阪府立高等海員學校ハ練習科制度ナキヲ以テ除ク)十一ノ公立商船學校ニ於テ從來ヨリ練習船ヲ所有シタリシ學校ハ五校ニ過ギザリキ即チ北海道廳立函館商船學校ノ函館丸(總噸數三五八噸三橋バーカントイン型補助機關付帆船)三重縣立鳥羽商船學校ノあまき丸(總噸數三〇〇噸三橋バーカントイン型補助機關付帆船)廣島縣立商船學校ノ藝備丸(總噸數一九五噸ブリガントイン型帆船)山口縣立大島商船學校ノ防長丸(總噸數二七〇噸三橋バーカントイン型帆船)及鹿兒島縣立商船水産學校ノ霧島丸(總噸數九九七噸四橋バーカントイン型補助機關付帆船)ナリ而モ是等練習船ハ何レモ木造ノモノニシテ最大ノモノト雖モ千噸ヲ超ヘズ殘餘ノ六校ニ於テハ民間ニ於ケル横帆装置ノ帆船ニ依賴シ又之ヲ備船シテ本科航海科卒業生ヲ乗船セシメ練習科ノ課程ヲ履マシムルヲ常態トセリ然ルニ此ノ間生徒ノ訓育上遺憾トスル點少ナカラズ且ツ又木造小型帆船ノタメニ屢々行衛不明等ノ悲惨事アリ即チ香川縣立栗島航海學校依託練習船七寶丸(總噸數二六六噸ブリガントイン型帆船)ガ明治四十三年十一月ニ又同校依託練習船西別丸(總噸數一八二噸ブリガントイン型帆船)ガ大正十一年四月ニ行衛不明トナリ更ニ大正十四年二月ニハ前記山口縣立大島商船學校練習船防長丸ガ伊豆神津島ニテ沈没シ前後三回ニ亙リ生徒二十九名乗組員十名ノ生命ヲ失ヒタルヲ始メトシ其他ノ民間帆船ニ於テ練習シタリシ生徒中ヨリセ又多數ノ犠牲者ヲ出セリ事情斯ノ如クナリシヲ以テ大型帆船ノ必要ハ漸次各方面ノ識者ノ痛感スル所トナレリ

文部省ニ於テモ夙ニソノ必要ヲ認メ大正十四年ヨリ公立商船學校本科航海科卒業生ノタメニ二千五百噸型練習船二隻ノ建造ヲ計畫シ之ガ實現ヲ期シタルガ偶々前記鹿兒島縣立商船水産學校練習船霧島丸ガ昭和二年三月九日

伊豆下田港ヲ出帆シ銚子沖合ニテ暴風雨ニ會ヒ遂ニ行衛不明トナリ乗組員二十三名生徒三十一名ノ生靈ハ船體ト共ニ海底ノ藻屑ト化シタル悲惨事ヲ惹起セリ、コノ椿事ハ痛ク世人ノ耳目ヲ衝動シ大型練習船ノ整備ヲ絶叫セシムルニ至リ同年第五十五臨時議會ニ於テ之ニ關スル質問及公立商船學校用練習船二隻建造ノ建議提出サレ、遂ニ毎年文部省ヨリ提出シツツアリタル練習船二隻ノ建造豫算案百八十七萬四千六百圓ハ昭和三年度同四年度ノ繼續事業トシテ議會ノ協賛ヲ經ルニ至レリ

昭和三年七月十六日右豫算ニ依リ建造スベキ練習船ノ設計調査ヲ爲シ、仕様ヲ決定スルタメ地方商船學校實習用練習船設計調査委員會設置セラレタリ、右委員會ニテ審議ノ結果各練習船ノ大要ハ總噸數約二二五〇噸四橋バーカントイン型鋼製帆船トシ補助機關ハディーゼル機關速力約十一節生徒收容人員百二十名ト決定セリ、昭和三年十二月五日練習船設計圖及仕様書ノ成案ヲ得タルヲ以テ昭和四年一月十一日練習船建造ノ注文ヲ一般競争入札ニ付シタル結果神戸川崎造船所ニ落札セリ、仍テ練習船建造委員及現場監督ノ囑託アリ爾後其ノ監督ノ下ニ順調ニ工事進捗セリ、昭和五年一月二十七日第一船進水田中文部大臣ニ依リ日本丸ト命名セラレ更ニ二月十四日ニハ第二船進水同ジク文部大臣ニ依リ海王丸ト命名セラル、後兩船艙裝設備ハ進行シ三月三十一日日本丸ノ艙裝完了シ文部省ニ引繼ヲ了シ續イテ五月十九日海王丸完成文部省ニ引繼ヲ了セリ

是ヨリ先文部省ニ於テハ兩船ヲ管理シ公立商船學校本科航海科ヲ卒リタル者ヲシテ航海ノ練習ヲ爲サシムルタメ新ニ航海練習所設置ノ成案ヲ得、昭和五年五月二十九日勅令第百八號ヲ以テ航海練習所官制(別項參照)同年



五月三十日文部省令第十五號ヲ以テ航海練習所規程（別項參照）公布セラレ茲ニ同年六月一日ヲ以テ多年ノ懸案  
タリシ本所ノ創立ヲ見事務所ヲ文部省構内ニ設置セラレタリ

越エテ昭和十四年八月十九日勅令第五八六號ヲ以テ富山商船學校、鳥羽商船學校、大島商船學校並鹿兒島商船  
學校創設セラレ（富山縣立商船學校、三重縣立鳥羽商船學校、山口縣立大島商船學校並鹿兒島縣立商船學校ハ前  
日限廢止）更ニ翌十五年七月一日勅令第四四一號ヲ以テ廣島商船學校、粟島商船學校並弓削商船學校ノ創設アリ  
テ（廣島縣立商船學校、香川縣立粟島航海學校並愛媛縣立弓削商船學校ハ前日限廢止）コレヲ七官立商船學校航  
海科生徒ヲ入所セシムルコトナリタリ

(二) 法 規

(1) 航海練習所官制

昭和五年五月二十九日 昭十四年十一月十日  
勅令 第百八號 第七百六十五號 改正

第一條 航海練習所ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ文部大臣ノ指定シタル商船學校航海科生徒ヲ入所セシメ航海ノ練  
習ヲ爲サシムル所トス

第二條 航海練習所ニ左ノ職員ヲ置ク  
所長

技師 專任 六人 奏任  
技手 專任 六人 判任  
書記 專任 二人 判任

第三條 所長ハ文部省高等官ノ中ヨリ文部大臣之ヲ補ス

所長ハ文部大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 技師及技手ハ上官ノ命ヲ承ケ練習船ノ航海ニ關スル事ヲ掌リ兼テ航海ノ練習ヲ指導ス

第五條 書記ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

(2) 航海練習所規程

昭和五年五月三十日  
文部省令第十五號

昭和十四年十一月十一日  
第五十五號 改正

第一條 航海練習所ノ練習期間ハ一年三月以内トス

第二條 航海練習所ニ入所セシムベキ者ハ官立商船學校航海科席上課程修了者及公立商船學校本科航海科ヲ卒  
業シタル者ニシテ官立商船學校ニ編入セラレタル者トス但シ尋常小學校卒業程度ヲ以テ入學資格トスル修業年  
限五年又ハ之ト同等以上ノ課程ノ公立商船學校ノ練習科航海科生徒ヲ入所セシムルコトヲ得

第三條 航海練習所ニ於テハ航海實習ノ外修身、國語、數學、英語、航海術、運用術、機關術、氣象學、海運、海事法規、無線電信、船舶衛生等ヲ課スルモノトス

第四條 所長ハ航海練習所所定ノ課業ヲ了リタル者ニハ修了證書ヲ授與スヘシ

第五條 所長ハ成業ノ見込ナシト認メタル者及性行不良ナル者ニハ退所ヲ命スヘシ

第六條 生徒ハ自己ノ便宜ニ因リ退所スルコトヲ得ス但シ己ムコトヲ得サル事由ニ因リ所長ノ許可ヲ得タルトキハ此ノ限ニ在ラス

第七條 所長ハ教育上必要ト認メタルトキハ生徒ニ懲戒ヲ加フルコトヲ得

第八條 所長ハ航海練習所修了者ニシテ特ニ航海ニ關スル事項ヲ研究セントスルモノアルトキハ之ヲ在所セシムルコトヲ得

第九條 航海練習所ニ於テハ授業料ヲ徴收セス

附 則

本令ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

(3) 航海練習所長職務規程

昭和五年六月二日  
文部省訓令

第一條 所長ハ判任官ノ進退ヲ具狀シ及高等官ノ進退ニ付意見ヲ具シ文部大臣ニ稟申スルコトヲ得

第二條 左ノ事項ハ所長之ヲ專行スヘシ但シ第六號及第七號ニ關シテハ處分後文部大臣ニ報告スヘシ

第一 職員ノ授業擔任及事務分擔ヲ定ムルコト

第二 規則ノ施行上必要ナル細則ヲ定ムルコト

第三 俸給月額八十五圓以下ノ雇員ノ進退ニ關スルコト

第四 技師以下ノ内國各地出張ニ關スルコト

第五 技師以下ノ除服出仕請暇ニ關スルコト

第六 囑託員ノ解囑及其ノ報酬減額ニ關スルコト

第七 三日以内ノ臨時休業ヲ爲スコト

第三條 前條ニ掲ケタル事項ノ外文部大臣ノ許可ヲ受ケ之ヲ施行スヘシ

(4) 航海練習所規則

昭和五年六月二十六日許可

改正 昭和九年五月二日 昭和十年八月十六日 昭和十三年八月十二日

第一章 總 則

第一條 本所ハ航海練習所官制及航海練習所規定ニ依リ航海ノ練習ヲ爲サシムルヲ以テ目的トス

第二條 本所ノ練習期間ハ一年三月以内トス

第二章 課業及休業日

第三條 航海練習ハ本所々屬ノ練習船ニ於テ之ヲ行フ

第四條 學科目ハ修身、國語、數學、英語、航海術、運用術、機關術、氣象學、海運、海事法規、無線電信、船舶衛生等トス

第五條 休業日ヲ定ムルコト左ノ如シ但シ航海中ハ船長ノ定ムル所ニ依ル

一、大祭祝日

二、日曜日

三、創立記念日

四、靖國神社大祭

五、海軍記念日

第三章 入在所退所及懲戒

第六條 入所期ハ毎年十月ヲ以テ常例トス

第七條 入所セシムヘキ者ハ航海練習所官制第一條ニ依リ文部大臣ノ指定シタル商船學校ニ於テ本科航海科ヲ卒リタルモノニシテ且所定ノ身體検査ニ合格シタルモノトス

第八條 前條ノ商船學校ノ校長ハ入所セシメントスル者ニ付左記書類ヲ具シ所長ニ出願スヘシ

一、履歷書(第一號書式)

二、所見表(第二號書式)

三、身體検査書(第三號書式)

四、戶籍謄本

第九條 入所ヲ許可セラレタル者ハ誓書(第四號書式)ヲ所長ニ提出スヘシ

第十條 誓書ニ要スル保證人ハ父兄又ハ之ニ代ルヘキ親族ニシテ本人在所中ニ關スル一切ノ件ニ付其ノ責ニ任

スルコトヲ得ル者タルヘシ

第十一條 保證人死シタルトキ若ハ保證人ヲ變更スルトキ又ハ所長ヨリ不適當ト認メラレタルトキハ新ニ保證人ヲ定メ保證人變更届ヲ差出スヘシ

第十二條 保證人ニシテ轉籍、轉居、改氏名又ハ改印ヲ爲シタルトキハ直ニ之ヲ届出ツヘシ

第十三條 生徒ニシテ轉籍、改氏名又ハ改印ヲ爲シタルトキハ直ニ之ヲ届出ツヘシ

第十四條 生徒ハ自己ノ便宜ニ依リ退所スルコトヲ得ス但シ所長ニ於テ事情已ムヲ得スト認メタルトキハ此ノ限

リニアラス

第十五條 生徒ニシテ左記各號ノ一ニ該當スル者ハ退所ヲ命ス

一、課業劣等又ハ傷痕ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ成業ノ見込ナキ者

二、性行不良ニシテ船舶職員タルニ適セサル者

第十六條 生徒タルノ本分ヲ紊ル者ハ所長之ヲ懲戒ス

懲戒ハ分チテ戒飭、謹慎及放所トス

第四章 成績考査及修了

第十七條 成績ハ平素ノ勤惰、課業ノ成績ヲ考査シテ甲乙丙ノ評語ヲ附シ之ヲ定ム

第十八條 品行方正學業優秀ニシテ衆ニ範タルモノニハ賞狀(第五號書式)ヲ授與ス

第十九條 所定ノ課業ヲ了リタル者ニハ修了證書(第六號書式)ヲ授與ス

第五章 研究

生

第二十條 修了者ニシテ特ニ航海ニ關スル事項ヲ研究セントスルモノアルトキハ一年以内研究生トシテ在所セシムルコトヲ得

第六章 學 費

第二十一條 授業料ハ之ヲ徴收セス

第二十二條 生徒ニ對シテハ別ニ定ムル所ノ規定ニ依リ食糧ヲ支給ス

第二十三條 生徒ニシテ修業上傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ官費ヲ以シ治療セシムルコトアルヘシ

第七章 服 制

第二十四條 本所ノ服制ハ別表ノ如ク定ム

第二十五條 本所ノ徽章ハ左ノ如シ



附 則

本則ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

本則施行ニ關シ必要ナル細則ハ所長之ヲ定ム

第一號書式(用紙美濃紙)

履 歷 書

氏 名  
(片假名ヲ附スヘシ)

年 月 日 生

一、本 籍

一、出 生 地

一、現 住 所

一、戸主及戸主ノ職業

一、戸主トノ續柄

一、學 歴

一、從事シタル職業

一、賞 罰

右ノ通相違無之候也

年 月 日

右 氏

名 印

第二號書式

所見表

氏名	入學年月及學年		中途退學年月及學年		卒業年月	
	氏名					
學業成績	第 學年	第 學年	第 學年	第 學年	第 學年	第 學年
	席次	勤怠	長所	短所	勤怠	長所
性質習癖	校長ノ認ムル所ヲ記ス					
操行	在校中ノ操行及賞罰ノ概略ヲ記ス殊ニ衆人ノ模範トナルヘキ舉動又ハ擯斥スヘキ行爲ヲリタルトキハ其概略ヲ摘記スルヲ要ス					
備考	前記事項以外ノ必要事項ヲ記入ス					
所見	本人ノ人格及學科ノ進歩ニ就キ校長ノ所見ヲ記入ス					
年 月 日	學校所左地		何々學校長		氏 名	

第三號書式

身體檢查書

氏名	生年月日	概評	身長	體重	胸圍	胸部擴張	活量	眼力	視力	辨色
									左 號、 右 號	

醫師官職住所 氏名印	検査執行		記事	疾病及異状	體格	聽覺	耳
	年月日	場所					
						左	右
						尺	寸
						尺	寸

第四號書式(用紙美濃紙)

誓書

私儀今般御所ニ入所御許可相成候ニ付テハ御規則堅ク相守リ決シテ違背仕間敷尙本人身上ニ關スル一切ノ件ハ保證人ニ於テ引受可申仍テ保證人連署ノ上此段誓約候也

年 月 日

本籍

現住所

本籍

職業

現住所

本人トノ關係

氏

名 ㊦

保證人 氏

名 ㊦

航海練習所長氏名殿

第五號書式

賞 狀

氏 名

右者品行方正學業優等ナリ仍テ之ヲ賞ス  
年 月 日

航海練習所 ㊦

第六號書式

修了證書

氏 名

所印

右者本所所定ノ課業ヲ了ヘタリ仍テ之ヲ證ス

航海練習所長位勳爵 氏

名 ㊦

第 號  
年 月 日

別 表

雨衣			事業服		外 套	帽	夏 服		冬 服		種 類	地 質	制 式	袖 章	襟 章	前 章	
笠	袴	上衣	袴	上衣			袴	上衣	袴	上衣							
同 右	同 右	白綿引木 油キ	白小倉	同 右	紺羅紗	同 右	白綿リ ネ	同 右	紺サージ	同 右	普通仕立	堅襟背廣形、表隱シ 左右下部各一個、所章打出シ胸紐 鈕五個縦列	同 右	襟ノ前面右側 ニ金製ノ錨ヲ 附ス	同 右	同 右	同 右
サウエスタ型	普通仕立、紐白色角、但シ胸 ヲ紐ヲ以テ結ブ様紐ヲ中繼トス	折襟胸紐白色角五個縦列二行	ジャンパー型	乘馬型、前面紐三個縦列 面帶緒紐三個横列	海軍型	冬服袴ニ同ジ	冬服上衣ニ同ジ	冬服袴ニ同ジ	同 右	同 右	冬服襟章ニ同ジ	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右	同 右
					金色金屬 製所章												

靴	黑短靴、ゴム長靴、黒地下足袋
肌着	白
靴下	黒木綿

(5) 航海練習所練習船舶則

昭和八年一月三十一日制定

改正昭和九年四月一日

昭和十五年六月十五日

第一章 總則

第一條 練習船ハ航海練習所ノ生徒ヲ收容シ航海練習所々定ノ學術及技業ヲ習得セシメ且船舶職員タルニ適スル志操ヲ涵養セシムルヲ以テ目的トス

第二條 練習船ノ航海ハ帆走ヲ主トス

船長ニ於テ必要ト認ムル場合ハ機力ヲ併用シ又ハ機力ノミニ依ルコトヲ得

第三條 練習船ノ航海ハ其ノ都度船長ヨリ所長ニ内申スヘシ

第四條 練習船ハ生徒ノ實習上必要アルトキ貨客ノ運送ヲ爲スコトヲ得

但シ此ノ場合ニ於テ船長ハ豫メ所長ノ承認ヲ受クヘシ

第五條 練習船ノ乗組員ハ和衷協同以テ職務ニ精勵シ克ク其ノ體面ヲ重ンジ一般商船乗組員ノ儀表タランコト

ヲ期スヘシ

第六條 本則ニ於テ船員ト稱スルハ船長及海員ヲ謂ヒ海員トハ船長以下ノ一切ノ乗組員ヲ謂フ

第七條 本船乗組員ノ死亡、退職、傷病等ニ對スル待遇ハ夫々定メラレタル法令ニ據ルモノトス 但シ法令ニ

據リ難キ場合ハ其ノ都度之ヲ定ム

第八條 本則ニ規定ナキ事項ニ關シテハ各法令ノ定ムル所ニ依ル

第二章 職制及處務

第九條 練習船ニ左ノ職員ヲ置ク

- 一、船長
- 二、一等運轉士、次席一等運轉士、二等運轉士、三等運轉士、四等運轉士
- 三、機關長、一等機關士、二等機關士、
- 四、事務長、事務員
- 五、船醫
- 六、首席通信士、次席通信士
- 七、講師

第十條 普通海員トシテ左ニ掲クル傭人ヲ置ク



- 一、水夫長、水夫次長、大工、舵取、看護手
- 信號手、水夫、水夫見習
- 二、火夫長、油差、火夫、火夫見習
- 三、司厨長、一等料理人、料理人、料理人見習、一等給仕
- 給仕、給仕見習

第十一條 練習船内ニ左ノ五部ヲ置ク

- 一、甲板部
- 二、機關部
- 三、事務部
- 四、醫務部
- 五、無線通信部

第十二條 甲板部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一、航海運用ニ關スルコト
- 二、生徒ノ教育及訓練ニ關スルコト
- 三、船内規律ニ關スルコト

- 四、船體、艙裝物件ノ保存手入及修理ニ關スルコト
- 五、甲板部ニ屬スル船用品ニ關スルコト
- 六、「バラスト」、飲料水ニ關スルコト
- 七、旗章及信號ニ關スルコト
- 八、氣象ニ關スルコト
- 九、航海日誌ニ關スルコト
- 一〇、其ノ他他部ニ屬セサル事項

第十三條 機關部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一、機關ノ運轉並ニ保存手入及修理ニ關スルコト
- 二、燃料及罐用水ニ關スルコト
- 三、機關部ニ屬スル船用品ニ關スルコト
- 四、船内機械類ノ保存手入及修理ニ關スルコト
- 五、機關日誌ニ關スルコト
- 六、炊事用石炭ニ關スルコト
- 七、其ノ他機關部ニ屬スル事項

第十四條 事務部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一、庶務及會計ニ關スルコト
  - 二、賄ニ關スルコト
  - 三、事務部ニ屬スル船用品ニ關スルコト
- 第十五條 醫務部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル
- 一、診察、治療及身體檢査ニ關スルコト
  - 二、保健衛生ニ關スルコト
  - 三、醫務部ニ屬スル船用品ニ關スルコト

第十六條 無線通信部ニ於テハ左ノ事項ヲ掌ル

- 一、無線電信ノ發受及其ノ料金ニ關スルコト
- 二、無線電信機及附屬器具ノ保存手入及修理ニ關スルコト
- 三、無線通信部ニ屬スル船用品ニ關スルコト

第三章 職 務

第一節 船 長

第十七條 船長ハ練習船ノ運航ヲ掌ルト共ニ各部ヲ統轄シテ一切ノ船務ヲ處理シ且航海練習所規程ニ依リ生徒ノ

教育並ニ訓練ヲ主掌ス

第十八條 船長ハ船舶及人命財産ノ保全並ニ船内ノ風紀及秩序ノ維持ニ付其ノ責ニ任スヘシ

第十九條 船長ハ航海ニ必要ナル準備ノ整頓及航海ノ安全ニ付其ノ責ニ任スヘシ

第二十條 船長ハ前二條ニ掲クル職責ヲ遂行スル爲法令ニ定メラレタル範圍内ニ於テ必要ナル一切ノ行爲ヲ爲スコトヲ得

第二十一條 船長ハ法令ニ定メラレタル書類及本所ヨリ交付シタル重要書類ヲ船内ニ備付ケ且之ヲ整理保存スヘシ

第二十二條 船長船舶ヲ離ル、トキハ一等運轉士ヲ在船セシメ之ニ其ノ職務ヲ委任スヘシ

第二十三條 船長ハ碇泊中執務ニ差支ナキ場合ニ限り職員及傭人ノ半數以下ヲ同時ニ離船セシムルコトヲ得

船長ハ前項ノ離船ヲ許可スルトキハ其ノ歸船時刻ヲ指定スヘシ

第二十四條 船長ハ船舶國籍證書ヲ滅失毀損シタルトキ若ハ其ノ記載事項ニ變更ヲ生シタルトキハ遲滞ナク其ノ事由ヲ所長ニ届出テ爾後必要ナル手續ヲ爲スヘシ

第二十五條 船長ハ船内ニ於テ死亡殺傷其ノ他ノ異變アリタルトキハ遲滞ナク所長ニ報告シ適當ノ手續ニヨリ處理スヘシ

第二十六條 船長ハ死亡者又ハ行衛不明者ノ遺産又ハ遺留品ハ適當ノ手續ニヨリ之ヲ處理シ其ノ詳細ヲ所長ニ報

告スヘシ

第二十七條 練習船ヨリ發スル文書ハ特別ノ規定アルモノ、外船長之ニ署名スヘシ

第二十八條 船長死亡シタルトキ船舶ヲ去リタルトキ又ハ之ヲ指揮スルコト能ハサルニ至リタルトキハ一等運轉士船長ノ職務ヲ行ヒ航海ヲ遂行スヘシ

第二十九條 船長ハ外國港灣碇泊中其ノ地官憲ニ對シ交渉ヲナサントスルトキ先ツ駐劄本邦大公使若ハ領事ト協議スヘシ

第三十條 船長ハ外國港灣碇泊中乗組員ヲシテ當該國法規ニ抵觸セシメサルヨウ特ニ留意スヘシ

第三十一條 船長ハ生徒ニ關スル考課表ヲ成規ノ形式ニ從ヒテ作成シ所定ノ期間ニ之ヲ所長ニ報告スヘシ

第三十二條 船長ハ乗組員ニ表彰スヘキ善行ヲ認メタル時ハ事由ヲ具シテ表彰方ヲ所長ニ申請スルコトヲ得

第三十三條 船長ハ航海中生徒ニ付懲戒スヘキ事實ヲ認メタルトキハ謹慎戒飭ヲ加フルコトヲ得此ノ場合ハ遲滯ナク所長ニ報告スヘシ

### 第二節 其ノ他ノ職員

第三十四條 一等運轉士ハ船長ノ命ヲ承ケ甲板部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第三十五條 一等運轉士ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ技業ヲ主掌シ且其ノ學習ヲモ擔任スヘシ

第三十六條 一等運轉士ハ船長ノ命ヲ承ケ各部ノ連絡ニ留意シ船内ノ警察事務ヲ處理スヘシ

第三十七條 次席一等運轉士ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習ヲ主掌シ且甲板部ノ業務ヲモ擔任スヘシ

第三十八條 二等、三等、四等各運轉士ハ上長ノ命ヲ承ケ所屬ノ業務ニ從業シ生徒ノ技業及學習ヲ補助スヘシ

第三十九條 機關長ハ船長ノ命ヲ承ケ機關部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第四十條 一等機關士及二等機關士ハ機關長ノ命ヲ承ケ所屬ノ業務ニ從事スヘシ

第四十一條 機關長及機關士ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習ヲ擔任スヘシ

第四十二條 事務長ハ船長ノ命ヲ承ケ資金前渡官吏監督ノ下ニ事務部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第四十三條 事務長ハ船長ヨリ命セラレタルトキ生徒ノ學習ヲ擔任スヘシ

第四十四條 事務員ハ事務長ノ命ヲ承ケ所屬ノ業務ニ從事スヘシ

第四十五條 船醫ハ船長ノ命ヲ承ケ醫務部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第四十六條 船醫ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習ヲ擔任スヘシ

第四十七條 首席通信士ハ船長ノ命ヲ承ケ無線通信部ノ業務ヲ主掌スヘシ

第四十八條 首席通信士ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習ヲ擔任スヘシ

第四十九條 次席通信士ハ首席通信士ノ命ヲ承ケ所屬ノ業務ニ從事スヘシ

第五十條 講師ハ船長ノ命ヲ承ケ生徒ノ學習若ハ技業ヲ擔任スヘシ

第五十一條 本節ニ規定ナキ海員ハ上長ノ指揮ヲ承ケ各所屬ノ業務ニ從事スヘシ

第四章 紀 律

二六

第五十二條 海員ハ上長ノ命ニ服從シ之ニ對シ抗議スルコトヲ得ス

第五十三條 海員ハ上長ニ對シ敬禮ヲ缺クヘカラス

第五十四條 海員ハ上長ニ對シ同盟シテ要求請願等ヲ爲スヘカラス

第五十五條 海員ハ傷病其ノ他事故ニヨリ休業セントスルトキハ成規ノ手續ヲ經テ船長ノ許可ヲ受クヘシ

第五十六條 海員ハ船長ノ許可ヲ受クルニアラサレハ離船スルコトヲ得ス 離船シタルトキ船長ノ指定時刻迄ニ

歸船スルコトヲ要ス

第五十七條 海員ハ船長ノ許可ヲ受クルニアラサレハ乗組員以外ノ者ヲ船内ニ宿泊セシムルコトヲ得ス

第五十八條 海員ハ指定外ノ場所ニ於テ喫煙シ又裸燈、手燭、洋燈、燐寸等ヲ使用スルコトヲ得ス

第五十九條 海員ハ服務中己ムヲ得サル事由ニヨリ所定ノ場所ヲ離レントスルトキハ上長ノ許可ヲ受クヘシ

第六十條 海員ハ兇器、爆發物其ノ他危險物又ハ酒類ヲ所持スルコトヲ得ス

第六十一條 海員ハ他人ノ業務執行ヲ妨害スヘカラス

第六十二條 海員ハ酩酊、喧噪又ハ鬪爭スヘカラス

第六十三條 海員ハ密輸入ヲナシ若ハ船内ニ於テ商事ヲ營ムコトヲ得ス

第六十四條 海員ハ賭博又ハ之ニ類似ノ行爲アルヘカラス

第六十五條 海員ハ船長ノ許可ヲ受クルニアラサレハ成規以外ノ服裝ヲ爲スヘカラス

第六十六條 海員ハ服務中閑話、睡眠、喫煙其ノ他懈怠ノ行爲アルヘカラス

第六十七條 海員ハ船内ノ機密ヲ漏洩スヘカラス

第六十八條 海員ハ本章ニ規定セサル事項ト雖モ苟クモ船内ノ風紀及秩序ヲ紊亂スルカ如キ行爲アルヘカラス

第五章 航 海

第一節 甲 板 部

第六十九條 船長ハ左ノ場合ニ於テ船橋ニアリテ自ら指揮スヘシ

一、港灣ヲ出入スルトキ

二、狹隘ナル水路ヲ航海スルトキ

三、濃霧其ノ他不良ナル天候ニ際會シタルトキ

四、其ノ他危險ノ虞アルトキ

第七十條 船長ハ水先人ヲ招聘シタルトキ其ノ業務ヲ監視スヘシ

第七十一條 船長ハ船橋ヲ去ラントスルトキ針路並ニ航海上必要ナル命令ヲ當直運轉士ニ與フヘシ

第七十二條 當直運轉士ハ船舶ノ運航ニ關シ當直員ノ業務ヲ指揮監督スヘシ

第七十三條 當直運轉士ハ左ノ場合ニ直ニ之ヲ船長ニ報告スヘシ

二七

- 一、船舶、燈火、陸地、島嶼等ヲ認メタルトキ
- 二、天候異變ノ徵アルコトヲ認メタルトキ
- 三、展帆收帆ノ必要ヲ認メタルトキ
- 四、船體又ハ機關ニ故障アルヲ知リタルトキ
- 五、其ノ他異狀ヲ認メタルトキ

第七十四條 當直運轉士ハ急迫ノ際船長ノ命令ヲ承クル違ナキトキハ其ノ責任ヲ以テ針路ノ變更、速力ノ増減其ノ他臨機ノ處置ヲ爲スコトヲ得 但シ其ノ場合ニ於テハ直チニ之ヲ船長ニ報告スヘシ

第七十五條 當直運轉士ハ航海燈ノ現狀ニ付當直員ヲシテ三十分毎ニ報告セシムヘシ

第七十六條 當直運轉士ハ蛇取交代スルトキ針路ノ誤ナキヤヲ確ムヘシ

第七十七條 當直運轉士交代スルトキハ針路、速力、天候、船位等ニ付詳細ニ引繼キ船長ヨリ與ヘラレタル命令ヲ傳達スヘシ

第七十八條 當直運轉士ハ常ニ救助艇及救命浮環ノ使用ニ支障ナカラシメ又救助艇員及其ノ要具ヲ整備シ置クヘシ

第七十九條 當直運轉士ハ夜間當直終了後船内ヲ巡視シテ異狀ナキヤ否ヤヲ點檢スヘシ

第八十條 當直運轉士ハ船長又ハ資格アル他ノ運轉士ト交代スルニアラサレハ當直樓ヲ去ルコトヲ得ス

第二節 機 關 部

第八十一條 機關長ハ當直ノ外左ノ場合ニ機關室ニアリテ自ラ指揮スヘシ

- 一、港灣ノ出入ヲ爲ストキ
- 二、狹隘ナル水路ヲ航行スルトキ
- 三、機關ヲ發動シ又ハ停止スルトキ
- 四、其ノ他船長ヨリ命セラレタルトキ

第八十二條 機關長ハ機關ノ損傷其ノ他危急ノ際臨機ノ處置ヲ爲スコトヲ得 但シ此ノ場合ニ於テハ遲滯ナク其ノ事由ヲ船長又ハ當直運轉士ニ報告スヘシ

第八十三條 機關長ハ燃油槽、石炭庫等ノ状態ニ留意シ瓦斯ノ爆發又ハ石炭ノ自然發火等ノ事故ヲ發生セサル様豫防スヘシ

第八十四條 當直機關士ハ機關室ニアリテ機關ノ運轉ニ關シ當直員ノ業務ヲ指揮監督スヘシ

第八十五條 當直機關士ハ機關ニ異狀ヲ發見シタルトキ直ニ之ヲ機關長ニ報告シ其ノ指揮ヲ請フヘシ

第八十六條 當直機關士ハ急迫ノ際機關長ノ命令ヲ承クル違ナキトキハ其ノ責任ヲ以テ臨機ノ處置ヲナスコトヲ得 但シ此ノ場合ニ於テハ直ニ之ヲ機關長ニ報告スヘシ

第八十七條 當直機關士交代スルトキハ機關ノ現狀並ニ當直中與ヘラレタル命令ヲ傳達スヘシ

第八十八條 當直機關士ハ機關長又ハ資格アル他ノ機關士ト交代スルニアラサレハ機關室ヲ去ルコトヲ得ス

第六章 日誌

第八十九條 船長ハ左ニ掲クル日誌ヲ船内ニ備付クヘシ

一、航海日誌

二、甲板部當直日誌

三、機關日誌

四、機關部當直日誌

第九十條 甲板部當直日誌ハ當直運轉士之ヲ記入シ航海日誌ハ一等運轉士之ヲ記入署名シ毎日船長ノ檢閲ヲ受クヘシ

第九十一條 一等運轉士ハ航海ノ終リニ於テ航海日誌ニ基キ航海撮要日誌ヲ調製スヘシ船長ハ署名ノ上之ヲ所長ニ提出スヘシ

第九十二條 機關部當直日誌ハ當直機關士之ヲ記入シ機關日誌ハ機關長之ヲ記入署名シ船長ノ檢閲ヲ受クヘシ

第九十三條 機關長ハ航海ノ終リニ於テ機關日誌ニ基キ機關撮要日誌ヲ調製スヘシ船長ハ署名ノ上之ヲ所長ニ提出スヘシ

第九十四條 航海日誌及機關日誌ハ如何ナル場合ト雖モ其ノ用紙ヲ廢棄シ又ハ書損シタル文字ヲ抹消スヘカラス

追加、削除若ハ訂正ヲ爲シタルトキハ船長及當該主任者之ニ署名スヘシ

第七章 旗章及信號

第九十五條 練習船ハ成規ノ旗章ヲ掲揚スヘシ

第九十六條 滿船飾ヲ施スヘキ場合左ノ如シ

一、紀元節

二、天長節

三、明治節

四、外國港灣碇泊中當該國ノ主ナル國祭日

五、其ノ他官廳ヨリ特ニ通知アリタルトキ

第九十七條 前條ニ掲クル以外ノ祝祭日及本所創立紀念日ニ於テハ船飾ヲ施スヘシ

第九十八條 天候其ノ他已ムヲ得サル事由アルトキハ前二條ノ規定ニ依ル滿船飾又ハ船飾ヲ省略スルコトヲ得

第九十九條 信號ハ特ニ許サレタルモノ、外船長ノ命令アルニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第一百條 航行中内外國軍艦ニ出會ヒタルトキ又ハ内外國燈臺ノ前ヲ通過スルトキハ成規ノ敬禮ヲ行フヘシ

第一百一條 碇泊中旗章掲揚ニ關シテハ其ノ地碇泊中ノ帝國軍艦ニ倣フヘシ

第一百二條 外國ノ港灣ニ碇泊中旗章掲揚ニ關シ疑アルトキハ成ルヘク駐劄本邦大使若ハ領事ト協議シテ之ヲ

決スヘシ

第八章 船用品

第三百三條 船用品トハ屬具、備品及消耗品ヲ謂フ

第三百四條 船用品ノ出納命令ハ船長之ヲ發スヘシ

第三百五條 船用品ノ出納、保管ハ物品會計規則ニ基キ文部省物品會計規程ニ依リ處理スヘシ

第三百六條 船用品ノ監守及取扱ハ左ノ區域ヲ各一部ト定ム

甲板部

機關部

事務部

醫務部

無線通信部

第三百七條 各部ニ物品監守者及物品取扱主任ヲ置ク

物品監守者ハ部ニ屬スル屬具、備品ヲ監守シ物品取扱主任ハ部ニ屬スル消耗品ノ受拂及保管ヲナス

第三百八條 法定屬具ニ付テハ物品會計官吏ハ特ニ目錄ヲ備ヘ置キ船舶檢査ノ便ニ供スヘシ

第九章 會計

第三百九條 會計ニ關シテハ總テ會計法規ニ據ルモノトス

第四百十條 資金前渡官吏ハ船長監督ノ下ニ其ノ職務ヲ行フヘシ

第四百十一條 資金前渡官吏ノ事務ハ船長監督ノ下ニ事務長之ヲ補佐スヘシ

第四百十二條 船内本金庫ハ船長室ニ備ヘ鍵ハ資金前渡官吏ニ於テ之ヲ保管スヘシ 但シ支拂ノ便宜上別ニ小金庫ヲ事務長室ニ備付クル事ヲ得

第十章 衛生

第四百十三條 船醫ハ乗組員ノ保健衛生ニ付テハ至重ノ注意ヲ拂ヒ必要アルトキハ船長ニ報告シテ適當ノ處置ヲ爲スヘシ

第四百十四條 船醫ハ生徒乗船並海員ノ雇入ノ際其ノ身體ヲ檢査シ服務ノ適否ヲ診定スヘシ

第四百十五條 外國ニ航海スルトキハ發航地及寄港地ニ於テ當該官廳ヨリ健全證書ヲ受ケ之ヲ船内ニ備ヘ置クヘシ

第四百十六條 乗組員中疾病ニ罹リタル者アルトキハ所屬部主任者ハ其ノ氏名ヲ受診簿ニ記入シテ船醫ニ交付シ其ノ診察ヲ受ケシムヘシ

第四百十七條 船醫ハ診療簿ヲ備ヘ置キ醫師法ノ定ムルトコロニ依リ記載シ船長ノ檢閱ヲ受クヘシ

第四百十八條 傳染病流行地ニ入港シ又ハ碇泊地ニ於テ傳染病發生シタルトキハ陸地又ハ他船トノ交通ニ注意スヘシ

船長ハ必要ト認ムルトキ交通遮断ヲナスコトヲ得

第一百十九條 船内ニ於テ傳染病ニ罹リタル者アルトキ又ハ疾病蔓延ノ兆アルトキハ其ノ原因ヲ探究シ直チニ適當ナル處置及其ノ豫防法ヲ講スヘシ

第一百二十條 航海中死亡者アリタルトキハ死亡後二十四時間ヲ經過スルニアラサレハ其ノ遺骸ヲ水葬ニ付スコトヲ得ス

第十一章 無線通信

第一百二十一條 通信士ハ無線電信ノ發受機具及業務用物品ノ保管取扱ニ付テハ至重ノ注意ヲ拂フヘシ

第一百二十二條 通信士ハ當該官廳ヨリ無線電信ノ使用、制限、停止又ハ機具ノ除去ニ關スル命令ニ接シタルトキハ船長ヲ經テ遲滞ナク所長ニ届出ツヘシ

第一百二十三條 通信士ハ船内ニ通信日誌ヲ備ヘ置キ法規ノ定ムル事項ヲ記入スヘシ

前項ノ通信日誌ハ船長ニ差出シ其ノ檢閲ヲ受クヘシ

第一百二十四條 通信士ハ航海ノ終ニ於テ通信日誌ニ基キ同抄録ヲ調製シ船長ヲ經テ所長ニ提出スヘシ

第一百二十五條 私設無線電信規則第三十三條各號ニ該當スル事實アリタルトキハ其ノ都度詳細ノ狀況ヲ船長ヲ經テ所長ニ報告スヘシ

第一百二十六條 當該官廳ヨリ無線電信ノ機具、運用狀況並ニ關係書類ノ檢査ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク其ノ詳細

ヲ船長ヲ經テ所長ニ報告スヘシ

第一百二十七條 無線電信ノ檢定證書又ハ假檢定證書ハ通信室内最モ見易キ場所ニ揭示スヘシ

前項ノ證書ヲ滅失毀損シタルトキハ直チニ再交付又ハ書換ノ手續ヲ爲シ直チニ船長ヨリ其ノ旨所長ニ報告スヘシ

第十二章 修繕及檢査

第一百二十八條 船舶ノ修繕又ハ模様替ヲ要スルトキハ其ノ箇所及理由ヲ詳記シ所長ニ伺出ツヘシ

第一百二十九條 各部ノ修理ハ成ル可ク乗組員ニ於テ之ヲ爲スヘシ

第一百三十條 船舶ノ修繕其ノ他ノ工事ニ付テハ一等運轉士及機關長ハ其ノ所管ニ屬スル部分ヲ監督スヘシ

第一百三十一條 船舶ノ修繕其ノ他ノ工事終リタルトキハ遲滞ナク其ノ報告書ヲ所長ニ提出スヘシ

第一百三十二條 船舶ノ檢査ヲ受ケントスルトキハ船長ハ必要ナル準備ヲ爲スヘシ

第一百三十三條 船舶檢査中一等運轉士及機關長ハ檢査官吏ニ隨伴シ其ノ主掌ニ屬スル部分ノ檢査ニ付便宜ヲ與フヘシ

第一百三十四條 船舶ノ檢査終了シタルトキハ遲滞ナク其ノ檢査報告書ヲ所長ニ提出スヘシ

第一百三十五條 船舶ノ檢査終了シタル後檢査官吏ヨリ交付セラレタル檢査手帳及安全辨ノ鍵ハ船長之ヲ保管スヘシ



第三百三十六條 船舶検査證書又ハ假證書ハ船内最モ見易キ場所ニ揭示スヘシ

前項ノ證書ヲ滅失毀損シタルトキハ直チニ再交付又ハ書換ノ手續ヲ爲シ直チニ其ノ旨所長ニ報告スヘシ

第十三章 海 難

第三百三十七條 船舶カ衝突、乗揚、火災其ノ他ノ海難ニ罹リタルトキハ船長ハ人命、船體、必要書類等ノ保護ニ付臨機ノ處置ヲ爲スヘシ

第三百三十八條 船舶カ海難ニ罹リ救助ノ見込ナキニ至リタルトキハ船長ハ總テ船内ニ在ル者ヲ去ラシメタル後ニアラサレハ船舶ヲ去ルコトヲ得ス

第三百三十九條 船舶カ海難ニ罹リタルトキハ乗組員ハ船長ノ命令アルニアラサレハ執務不可能ニ至ルマテ其ノ部署ヲ去ルコトヲ得ス

第四百十條 船舶カ海難ニ罹リタルトキハ關係官廳ニ報告シ船長ニ於テ必要ト認メタルトキハ當該官廳ノ認證ヲ受クヘシ

第四百十一條 船舶カ海難ニ罹リタルトキハ其ノ狀況ヲ所長ニ急報シ更ニ詳細ナル海難報告書ヲ調製シテ所長ニ提出スヘシ

第四百十二條 前條ノ海難報告書ニハ主トシテ左ノ事項ヲ明記スヘシ

一、事件ノ發生シタル日時及原因

二、當直職員ノ氏名

三、見張人及當直舵取ノ氏名

四、當時施行シタル危險豫防ノ措置

五、機關ノ運轉

六、船員並ニ便乗者ノ員數及其ノ死傷

七、船舶損傷ノ個所及其ノ狀況

八、當時施シタル救助ノ方法

九、衝突ノ場合ニ於テハ他船ノ名稱、番號、總噸數、船籍港、所有者、發航港、到達港及損害ノ現狀  
海難報告書ニハ第四百十條ノ報告書類ノ寫及其ノ事件ニ關係アル日誌ノ各寫ヲ添付スヘシ

第四百十三條 海難ニ依リ生シタル損害及費用ニ關シテハ詳細ナル記録ヲ調製シ遲滞ナク之ヲ所長ニ提出スヘシ

第四百十四條 海難ニ關シ當該官廳ヨリ取調又ハ訊問ヲ受ケタル乗組員ハ被審人タルト證人タルトヲ問ハス其ノ

答辯ノ詳細ヲ遲滞ナク所長ニ報告スヘシ

第四百十五條 救助ヲ求ムル船舶ヲ認知シタル時ハ本船急迫ノ危險ナキ限り他船ノ人命救助ニ從事シ其ノ詳細ヲ所長ニ報告スヘシ

(6) 航海練習所練習船乗組員被服規程

昭和五年五月十六日 決定

改正 昭和八年一月十八日

昭和十五年六月十五日

第一條 航海練習所練習船乗組備人ニハ本規程ノ被服ヲ貸與シ乗組中之ヲ着用セシム 但シ臨時備人ニハ之ヲ貸與セサルコトアルヘシ

第二條 被服ノ種類、地質、制式、貸與員數、貸與期間ハ左ノ區分ニ依ル

種 類	種 類 (日覆共)	種 類 帽	夏 帽	事 業 帽	冬 服		夏 服	
					袴	上衣	袴	上衣
地質	紺 木覆 綿ハ	白 日	麥 藻	白 部 ハ 茶 機 關 倉	紺 ヘ ル 地	同 右	白 葛 城 織	同 右
制式	大黒型、前面ニ金繡或ハ金屬製徽章ヲ附ス 形狀第一圖(イ)及(ロ)ノ如シ	大黒型、丸庇 前面ニ船名ヲ打込ミタル黒平紐ヲ附ス 形狀第二圖ノ如シ	鳥打型 形狀第三圖ノ如シ	襟ジヤケツト形 左腕ニ腕章ヲ附ス表隱シ右下部各一個 胸紐銀所章打出シ五個單行 形狀第四圖(イ)ノ如シ 普通仕立、紐黒色角 形狀第四圖(ロ)ノ如シ 冬服ニ同ジ	折襟、胸二重、左腕ニ腕章ヲ附ス 表隱シ左胸部一個胸紐黒色角、所章 打出シ、五個二行 形狀第五圖ノ如シ 折襟、胸二重、紐銀、白色角、五個二行 形狀第六圖(イ)ノ如シ 普通仕立、紐銀、白色角 但シ胸ヲ紐ヲ以テ結フ様紐ヲ中繼トス 形狀第六圖(ロ)ノ如シ 形狀第六圖(ハ)ノ如シ	フロツク型(給仕ヲ除ク)表隱シ左胸部一個 ジヤケツト型(給仕ニ限ル)紐銀白色 角、七個單行 形狀第七圖(イ)ノ如シ ジヤンパー仕立 形狀第七圖(ロ)ノ如シ 形狀第七圖(ハ)ノ如シ	同 右	同 右
貸與員數	一	一	一	二	一	一	二	二
貸與期間	三 個 年	二 箇 年	一 箇 年	一 箇 年	三 箇 年	三 箇 年	二 箇 年	二 箇 年

事 業 服	前 垂	袴	上 衣	雨 衣			(外 頭 布 付) 套
				笠	袴	上 衣	
	同	同	白 部 但 シ 機 關 倉 小 茶 色	同	同	白 天 竺 木 綿	紺 大 絨
	同	同	同	同	同	同	同
	同	同	同	同	同	同	同

備  
考

- 一、右表種類欄中夏帽及雨衣ハ甲板部員ニノミ同前垂ハ料理人ニノミ貸與ス
- 一、右表制式欄帽章中金繡或ハ金屬製着用ノ區別ハ航海練習所長之ヲ定ム

第三條 冬服及夏服ノ着用時期ハ當該船ニ於テ其ノ都度適宜之ヲ定ムヘシ

第四條 第二條ニ掲クル表中腕章ハ冬季用ノモノハ黒絨ノ上ニ赤羅紗夏季用ノモノハ白葛城織ノ上ニ黒羅紗ヲ以テ各徽章ヲ縫ヒ付ク其ノ形狀別圖ノ如シ

第五條 貸與シタル被服ニシテ所定ノ貸與期間ヲ經過シタルトキハ最後ニ貸與ヲ受ケタル者ニ之ヲ給與ス

第六條 前條ノ場合ニ於テ貸與期間中貸與ヲ受ケタル者ノ轉免死亡ニヨリ前任者ノ被服ヲ後任者ニ貸與セラレタルモノナルトキハ前任者ノ既ニ貸與セラレタル期間ハ所定ノ貸與期間ヨリ之ヲ控除スルモノトス

第七條 故意又ハ怠慢ニ依リ被服ヲ亡失シ若ハ毀損汚穢シテ着用ニ堪ヘサラシメタルトキハ左ノ價格ヲ辨償セシム

一、其ノ原價ヲ貸與期間ノ日數ニシテ除シタル高ニ殘餘ノ保存日數ヲ乘シタル額

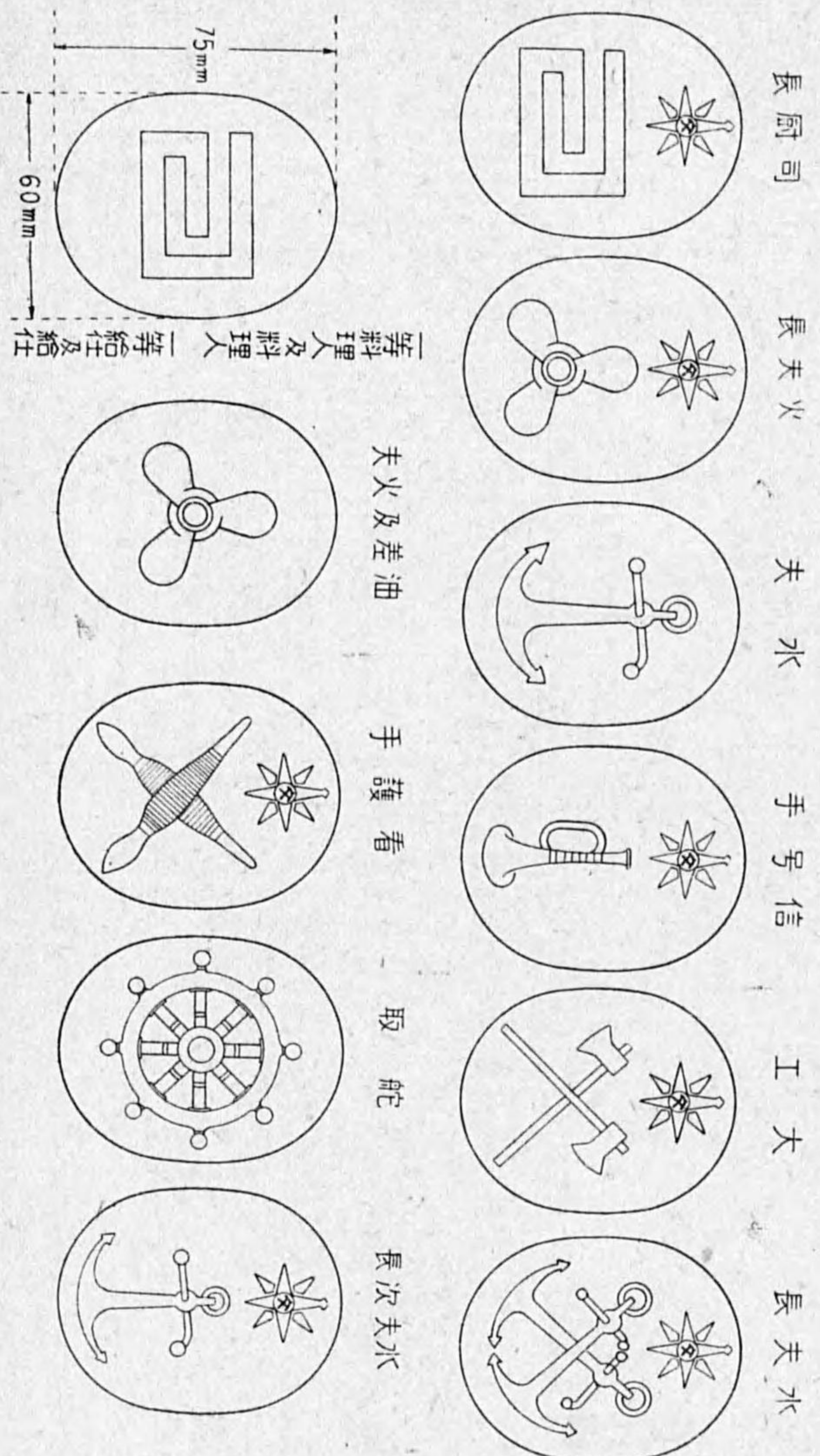
二、前號ニ依リ難キトキハ航海練習所長ニ於テ相當ト認ムル價格

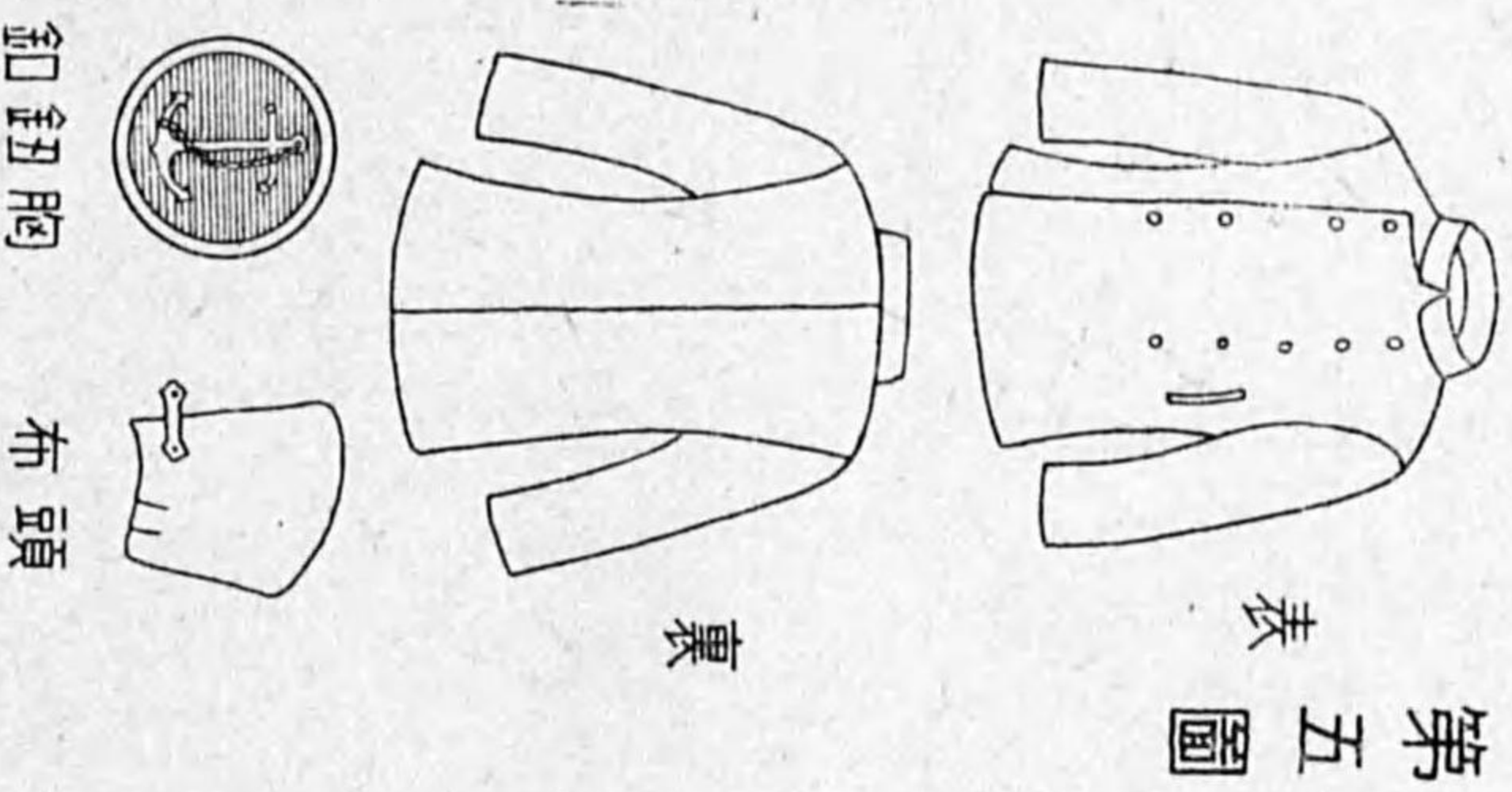
第八條 貸與シタル被服ニハ凡テ指定ノ箇所ニ各自ノ氏名ヲ記入スヘシ

附 則

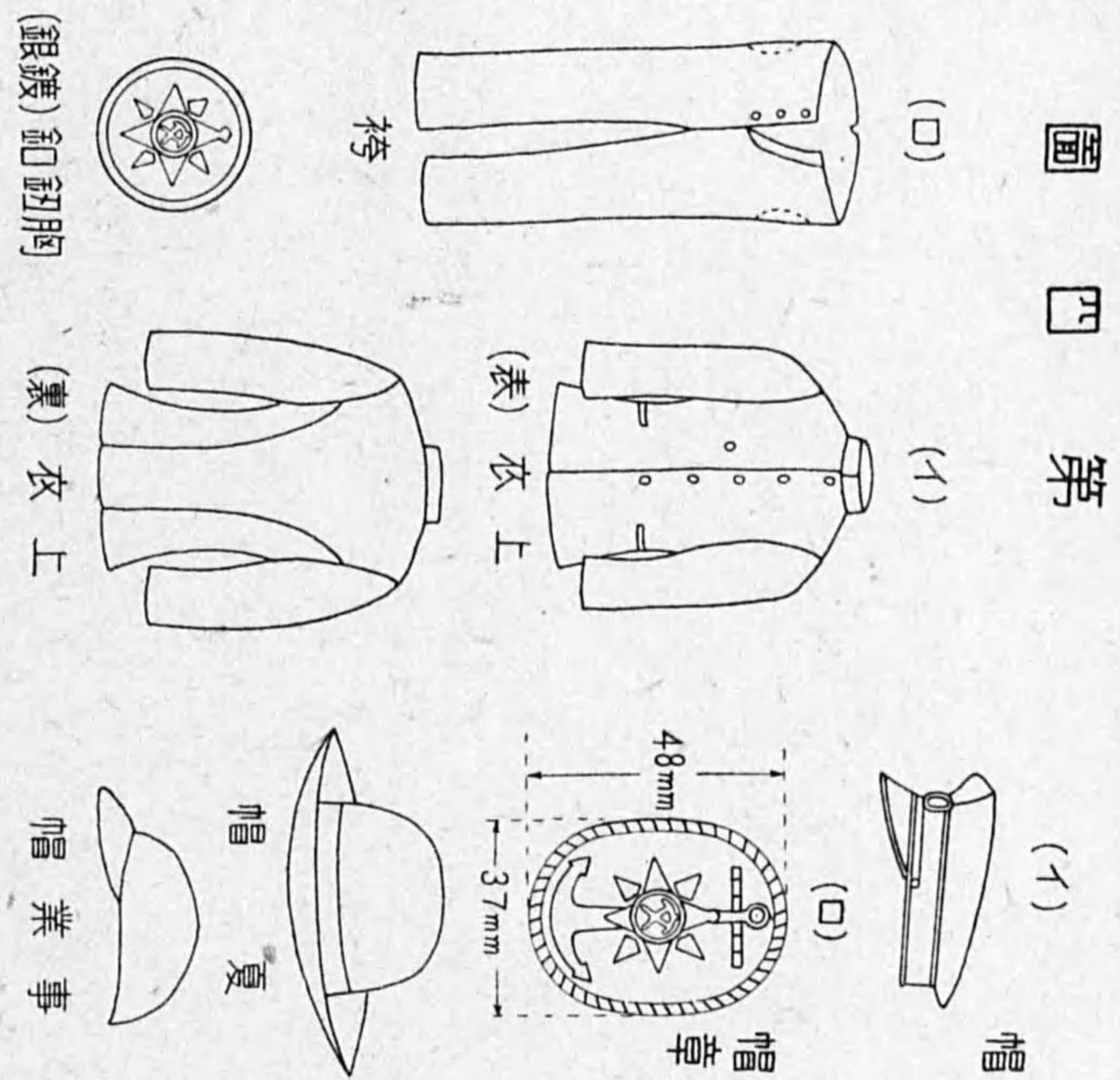
規程ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

腕 章



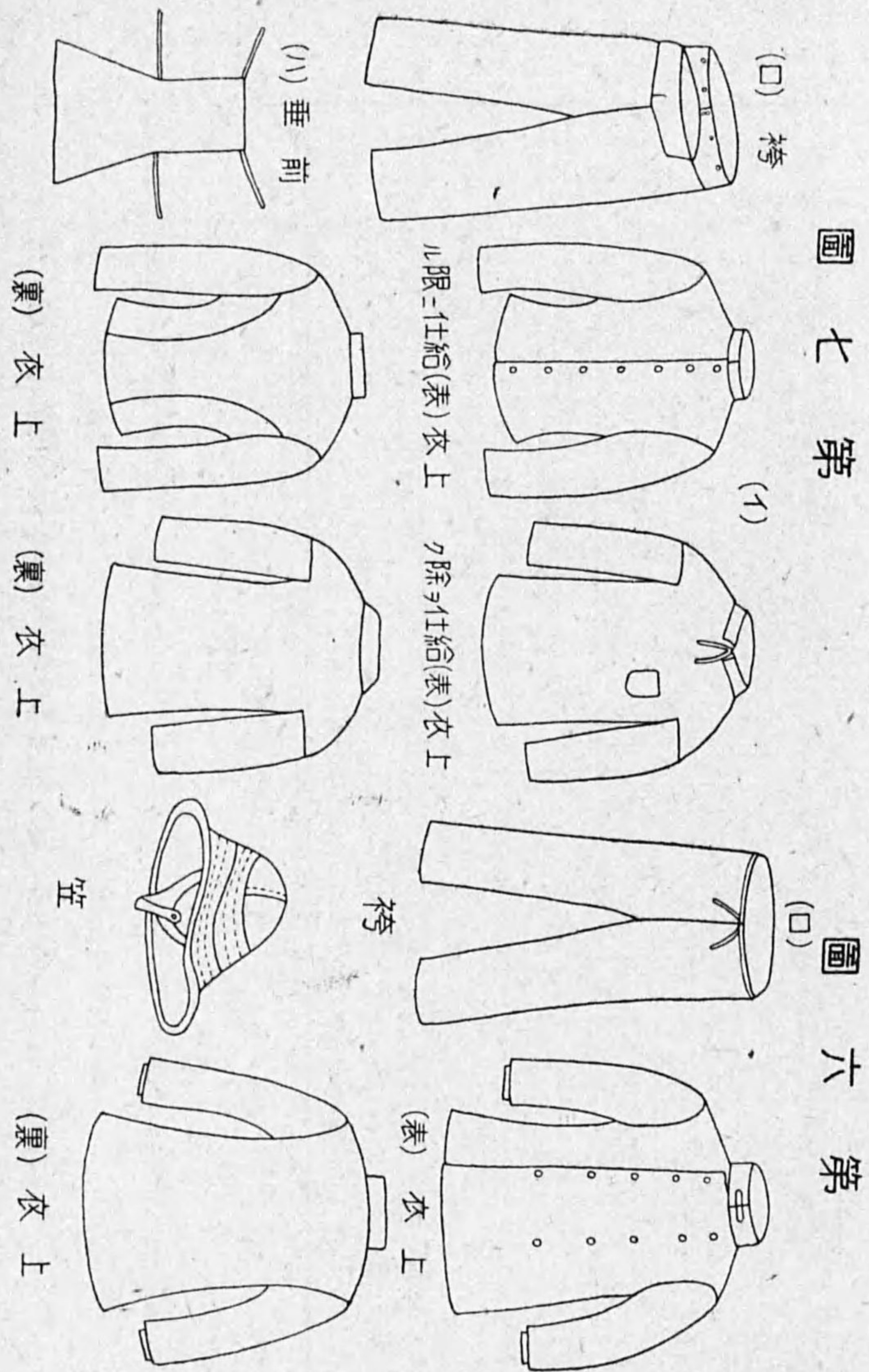


第五圖



第四圖

第一圖 第二圖 第三圖



第七圖

第六圖

(7) 練習船乗組員航海日當及食卓料支給ノ件 昭和六年一月二十一日次官裁定

改正 昭和九年四月一日 昭和十三年五月一日 昭和十五年六月十五日

本所練習船乗組員ニ支給スル航海日當及食卓料ニ關シテ昭和六年一月十五日ヒリ別表ノ通改正ノ上支給相成可  
然哉

別表

備人	嘱託員	判任官及嘱託員	技師		區分					
			船	其他ノ者	航海日當(一日ニ付)	食卓料(一夜ニ付)	航海國	航内國	航海國	航内國
水夫	火夫	長	司厨長	長	四、五〇	一、四五	一、二〇	一、二〇	一、二〇	八五
水夫	次長	長	長	者	三、八五	一、一五	一、二〇	一、一〇	一、一〇	八五
大工、舵取、看護手、信號手、油差、一等料理人、一等給仕	給料手當月額五十圓以上	給料手當月額五十圓未滿			二、五五	八〇	一、二〇	一、一〇	一、一〇	八五
水夫	火夫	長	司厨長	者	一、〇五	五五	一、二〇	一、一〇	一、一〇	八五
水夫	次長	長	長	者	六〇	四五	七五	五五	五五	五五
水夫	長	長	長	者	四五	三五	七五	五五	五五	五五
水夫	長	長	長	者	四五	三〇	七五	五五	五五	五五

備考

南洋群島關東州南滿洲内ノ航海若クハ此等地域相互間ノ航海又ハ南洋群島關東州南滿洲ト其他ノ地方トノ間ノ航海ニ就テハ外國航海ト同様ノ日當及食卓料ヲ支給ス

(三) 練習船

(1) 練習船要目

船名	番号	信號符字	船級資格	船級質	總噸數	純噸數	長
日本丸	三六二一二	J F L C	一級遠洋	鋼	二二八三噸九八	八七八噸三九	七九米二五
海王丸	三六二一六	J F P C	一級遠洋	鋼	二二八三噸九八	八七八噸三九	七九米二五

巾	一二米九五	巾	一二米九五
深	七米八五	深	七米八五
最高速力	帆走約一三節 汽走一・八三節	最高速力	帆走約一三節 汽走一・八三節
帆船ノ帆装	四檣バーク	帆船ノ帆装	四檣バーク
機關ノ種類及數	發動機二個	機關ノ種類及數	發動機二個
進水年月日	昭和五年一月	進水年月日	昭和五年二月
製造所	神戸川崎造船所	製造所	神戸川崎造船所

四六

(2) 練習船航海狀況

船名	日本丸		海王丸	
	發航年月日	歸航年月日	發航年月日	歸航年月日
昭和五年短期	五、七、七	五、七、三	五、七、七	五、七、三
昭和五年短期	五、八、一五	五、八、一六	五、八、一五	五、八、一七
昭和五年短期	二	二	三	三
總航海日數	七	七	七	七
總航程	豐湊	豐湊	豐湊	豐湊
寄港地	館山	館山	館山	館山

船名	發航年月日	歸航年月日	總航海日數	總航程	寄港地
昭和五年短期	五、八、一〇	五、八、一四	五	三三	館山、清水、横濱
昭和五年短期	五、九、六	五、九、一八	一三	七四	神戸
昭和五年短期	五、一〇、四	五、一〇、三	六	四、八〇	横濱、ボナベ島
昭和五年短期	六、一、三	六、二、三	三	三、三五	小笠原父島
昭和五年短期	六、四、二	六、七、二	九	八、四九	横濱、ホノルル
昭和五年短期	六、九、一五	六、一〇、一六	二	六、九	横濱、クサイ島、西郷、屋代島、粟島、神戸
昭和五年短期	六、一三、一五	六、一三、一六	一	六、五九	横濱、クサイ島、西郷、味野、神戸
昭和五年短期	六、一三、一五	六、一三、一六	一	六、五九	小笠原父島、清水
昭和五年短期	六、一三、一五	六、一三、一六	一	六、五九	横濱、サイパン、高雄、香港
昭和五年短期	六、一三、一五	六、一三、一六	一	六、五九	横濱、望蘭、石之卷
昭和五年短期	六、一三、一五	六、一三、一六	一	六、五九	横濱、ボナベ島、巴拉オ島、ダバオ、四日市

四七

昭和七年 第三次短期	八、三、七	八、三、八	二	五	浦賀															
第八次	八、四、八	八、七、五	八	九	横濱、ホノルル	八、四、八	八、七、四	九	六	横濱、海防、大連、青島、神戸										
昭和八年 第一次短期	八、八、三	八、八、五	一	三〇		八、八、三	八、八、五	一	三〇											
第九次	八、九、〇	八、九、三	八	六	横濱、ヤルポート、ボナベ島	八、九、〇	八、九、九	二	四	横濱、クサイ島、ヤツブ島、高雄、與那原										
昭和八年 第二次短期	九、一、五	九、三、一	三	六	横濱、小笠原父島、鳥羽															
第十次	九、四、三	九、七、〇	二〇	二	横濱、桑港	九、四、三	九、七、二	一〇	八	横濱、シヤトル										
昭和九年 第一次短期	九、八、三	九、八、三	一	四	横須賀															
昭和九年 第二次短期	九、一〇、三	九、一〇、二	三	三	浦賀															
第十一次	九、一〇、一〇	九、一〇、二	三	八	クサイ島、基隆、四日市	九、一〇、一〇	九、一〇、三	三	三	神戸、ボナベ島、ラポール、オ島、津久見、油津										
昭和九年 第三次短期	一〇、三、二	一〇、三、三	二	六	横濱															

第十二次	一〇、四、一〇	一〇、八、三	二六	二	横濱、エンセナダ、サンディゴ	一〇、八、三	一〇、五、四	二五	九	ビクトリア、晚香坡、横濱										
昭和十年 第一次短期	一〇、一〇、一〇	一〇、一〇、〇	五	四	川崎、館山															
第十三次	一〇、一〇、二	一〇、二、四	九	七	クサイ島、トラスク島、中城灣、横濱	一〇、一〇、二	一〇、三、三	二四	一〇	横濱、ヒロ、ヤルポート島、サイパン島										
第十四次	一一、四、五	一一、七、九	九	六	横濱、カフルイ、ケアラケケア、カイルア	一一、四、五	一一、八、三	三三	九	四日市、パラオ島、アンガウル島、ポートダウ、シンガポール										
昭和七年 第一次短期	一一、八、一〇	一一、一〇、九	四	二	横濱(定期検査)	一一、一〇、九	一一、一〇、一〇	四六	二	横濱(定期検査)										
昭和七年 第二次短期	一一、一〇、五	一一、一〇、二	九	七	神戸															
第十五次	一一、二、三	一一、三、六	七	六	横濱、ボナベ島、ハラオ島	一一、二、三	一一、三、八	五	六	トラツク島、横濱										
第十六次	一一、四、七	一一、九、七	三	四	ヒロ、ダヒチ島、ヤルポート島、横濱	一一、四、七	一一、九、六	二五	二	プリンス・ルバート、ポート・アレ、横濱										
第十七次	一一、五、二	一一、二、六	八	七	横濱、ボナベ島、高雄	一一、五、二	一一、三、一	一〇	九	横濱、クサイ島、ダバオ、鹿兒島										
第十八次	一一、五、三	一一、八、〇	三	二	シヤトル、ホノルル、横濱	一一、五、三	一一、九、三	二五	三	サンディゴ、ヤルポート島、横濱										

計	昭和五年 第一次短期	第二十二次	紀元二千六 百年記念	第二十一次	第二十次	第十九次	昭和五年 第一次短期
二、二七	一五、九、二五、九、三	一五、五、二五、九、四	一五、三、一〇、一五、四、五	一四、三、二五、二、二	一四、五、七、四、九、八	一四、一、三、四、三、九	一三、一〇、一四、三、一、七
一八、五四	一	一〇九	七	六	二五	六	一五
一、七、八〇	三	七、八〇	一、七、八〇	六、一九	二、二五	五、七、五	三〇
横須賀	横須賀	門、青島、横濱	江田島、油津	横須賀、名古屋、 ニアン島、鳥羽	横濱、桑港、ヒロ	クサイ島、サイ パン島、横濱	横濱
一五、九、三、五、九、三	一五、五、二五、九、四	一五、三、一〇、一五、四、五	一四、三、二五、二、二	一四、五、七、四、九、八	一四、一、三、四、三、五	一三、一、二、六、三、一、一〇	一三、一、二、六、三、一、一〇
二、三五	一	一〇九	六	二五	六	一五	一五
一七、八、七	三	七、七、七	一、八〇〇	六、三、九	二、三、三	五、六、六	三
横須賀	横須賀	門、青島、横濱	江田島、油津	横濱、クサイ島、 トラツク島、鳥羽	横濱、桑港、ヒロ	トラツク島、與 那原、横濱	横濱

(四) 職員

技師 所長 文部省實業學務局長 從軍豫備大尉 關口 小野 奈良 治 勳

書記

嘱託 正八 海軍豫備少尉 安藤 孝 吉

文部書記官

西崎 惠 小門 和之助 田口 謙三

東京高等商船學校教授

大崎 平太郎

從軍豫備大尉

青木 濱吉 柄澤 佐喜子

○練習船 日本丸

船長 從軍豫備大尉

西澤 貞徳





昭和三年度		昭和四年度		昭和五年度		昭和六年度		昭和七年度		昭和八年度		昭和九年度		昭和十年度	
海王丸	日本丸	海王丸	日本丸	海王丸	日本丸	海王丸	日本丸	海王丸	日本丸	海王丸	日本丸	海王丸	日本丸	海王丸	日本丸
七	七	四	五	五	四	七	七	一	一	一〇	一〇	八	八	八	八
六	六	四	四	九	一〇	九	七	一一	一一	一三	一三	七	七	九	八
五	五	六	七	四	四	一三	一四	八	八	一六	一五	九	八	八	八
五	五	六	七	二	二	一四	一五	二	二	一八	一八	一七	一八	一八	一六
七	六	六	六	一	一	八	六	九	一	一〇	一〇	九	九	一	二
五	六	六	四	五	五	七	七	七	六	六	七	三	三	二	三
四	五	六	七	五	五	四	四	一〇	九	一〇	一〇	九	八	一	二
八	八	二	一	七	七	四	五	五	五	六	六	九	一〇	四	五
一	一	一	一	一	一	一	一	五	六	五	四	六	五	四	四
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	五	六	六	六	六	六
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一〇	一一	一二	一二
四七	四八	四〇	四一	五八	五八	六六	六五	六七	六八	九九	九九	九三	九三	八三	八四
九五		八一		一六		一三一		一三五		一九八		一八六		一六七	

五五

昭和五年度	年度		校名
	海王丸	日本丸	
七	七名		富山商船學校
六	六名		鳥羽商船學校
八	八名		大島商船學校
一六	一七名		鹿兒島商船學校
九	九名		廣島商船學校
四	五名		粟島商船學校
八	七名		弓削商船學校
六	五名		兒島商船學校 岡山縣
二	三名		函館商船學校 北海道立
七	六名		商船學校 元島根縣立
一四	一三名		佐賀商船學校 佐賀縣立
八七	八六名		計
一七三			

(1) 入所生徒學校別表 (五) 生徒

雇  
同 船 一 二 次  
關 等 席  
士 機 通  
關 關 信  
士 士 士  
醫  
助鳥 中 關  
羽商 羽 中  
船船 船 船  
學學 學 學  
校校 校 校  
論論 論 論  
五 四  
四 六  
嘉 六  
村 吉  
恒 恒  
恒 恒  
吉 吉  
九 九  
二 二  
八 八  
利 利  
八 八  
郎 郎  
本 吉 片  
田 田 山  
宗 宗 定  
四 四 九  
郎 郎 二

氏名 本籍 氏名 本籍

塚田 仁 富山	富山 船學校	藤森 幸作 富山	富山
二口 三 富山	富山 堀江榮三郎	梶谷 甚一郎 富山	富山
湊 義男 富山	富山 橋 勇二		
鳥羽 羽 富山	富山		
熊野 誠 三重	三重 船學校		
	10小野 眞		
	北海道		
	泉		
	豊次		
	京都		

(3) 生徒氏名 (氏名頭書ノ數字ハ期別記入ナキハ全部第十二期生)

(日本丸乗組) 五十四名

福島	山梨	鳥取	熊本
茨城	長野	島根	大分
栃木	岐阜	岡山	宮崎
群馬	静岡	広島	鹿児島
埼玉	愛知	山口	沖縄
計	一二六		

(2) 生徒府縣別表

樺太	千葉	三重	九徳島
北海道	東京	滋賀	香川
青森	神奈川	京都	愛媛
岩手	新潟	大阪	高知
宮城	富山	兵庫	福岡
秋田	石川	奈良	佐賀
山形	福井	和歌山	長崎

計	昭和五年度		昭和四年度	
	海王丸	日本丸	海王丸	日本丸
六七	六七	七	六	四
八八	八六	六	六	八
九二	九二	七	七	七
一三三	一三四	八	八	六
九七	九六	九	一〇	七
五五	五六	五	五	五
六六	六七	五	五	五
五六	五六	一	一	四
二二	二二	一	一	一
二四	二四	一	一	一
三六	三六	一	一	一
七三	七三	四	四	四
七四	七六			七
	一、四七〇	九四		九四

星出徹朗	井上義光	10 村上實	8 青木司	前田博	宮增一郎	10 森谷操	10 青木留治郎	網谷清吉	湊武夫	10 石野桑男	富山	内田英夫	村上清	弓削
山口	福岡	山口	山口	三重	千葉	愛知	京都	富山	富山	石川	商船學校	岡山	愛媛	商船學校
清水正	石崎雅三	10 柴田繁	10 星野彦四郎	10 合山治	10 野田彦四郎	10 大脇鐵夫	10 本多國元	岐阜	富山	富山	吉川勳	山崎金男	愛媛	愛媛
山口	愛媛	福岡	三重	三重	三重	千葉	10 椋本喜代春	澤田辰雄	石灰義雄	新瀉	富山	富山	新瀉	富山
	中村輝	10 宮岡留雄	永谷茂	中村正司	永谷茂	10 椋本喜代春	中村正司	中村正司	中村正司	中村正司	中村正司	中村正司	中村正司	中村正司
	山口	福岡	山口	山口	山口	山口	山口	山口	山口	山口	山口	山口	山口	山口

(海王丸乗組) 七十二名

金子	山本幸男	栗島	鳥枝義明	柳原一二三	小田原武喜	10 井口康彦	廣島	日笠山芳久	横山親芳	福田盛行	鹿兒島	岡田清一	原田種一	10 栗栖禮一郎	中井定夫	竹本規
愛媛	香川	商船學校	山口	廣島	福岡	廣島	廣島	鹿兒島	鹿兒島	熊本	鹿兒島	山口	山口	廣島	大島	和歌山
林田和照	道上幸一	學校	小早川岩男	渡邊毅	小林博	精松義郎	廣島	前川浩	岩切義彦	福田政彦	鹿兒島	山口	山口	廣島	三重	和歌山
香川	香川		廣島	廣島	廣島	鹿兒島	鹿兒島	京都	鹿兒島	鹿兒島	山口	山口	山口	山口	山口	山口
	中濱春雄		橋本博	岡本顯士	山田薫明	今村正利	肥後健一	今村正利	今村正利	今村正利	今村正利	今村正利	今村正利	今村正利	今村正利	今村正利
	香川		愛媛	島根	廣島	鹿兒島	鹿兒島	鹿兒島	鹿兒島	鹿兒島	山口	山口	山口	山口	山口	山口

福島	山形	秋田	宮城	岩手	青森	北海道	樺太
四山梨	三福井	六石川	三富山	三新潟	七神奈川	三九東京	一千葉
鳥取	和歌山	奈良	兵庫	大阪	京都	滋賀	三重
六熊本	一六長崎	二佐賀	一七福岡	四高知	五愛媛	一香川	五六徳島
一五	九	八七	三一	五	七八	八五	一二

(1) 修了者府縣別表  
(六) 修了者

10 監物大助  
8 士井憲次  
岡山縣兒島商船學校  
10 藤田秀彦  
10 富谷隆一  
愛媛岡山  
10 黒田季一  
岡山

10 八塚俊作  
10 西宗一  
廣島  
10 進藤市郎  
愛媛  
月原計一  
愛媛  
小野忠  
香川  
丸岡裕  
香川  
9 山本秀夫  
香川  
三野武徳  
香川  
新川幸登  
廣島  
大成忠司  
廣島  
古川陽曹  
廣島  
金光浩  
廣島  
會根生雄  
廣島  
刺田論  
廣島  
10 行正義  
廣島  
10 菅博  
愛媛  
10 本崎靜雄  
廣島  
相川良悟  
鹿兒島  
山田純義  
鹿兒島  
川畑義徳  
鹿兒島  
山崎正志  
鹿兒島  
遠矢良和  
鹿兒島  
山崎正義  
鹿兒島  
10 溝邊宗雄  
鹿兒島  
10 永飯米男  
鹿兒島  
吉元正義  
鹿兒島





同	同	同	同	同	七、二〇	七、一五	七、一一	六、一一	四、二二	四、一一	三、二六	三、一一	一、二七	一、二六	一、一九	一、二三	一、二二
二	二	二	二	二	二	二	二	一	二	二	一	一	一	一	一	一	一
同	同	同	同	同	函館	鳥羽	富山	佐賀	廣島	弓削	佐賀	同	鹿兒島	同	富山	大島	弓削
谷澤文司	川村佐吉	高橋久六	石塚軍平	杉本正弘	遠藤恒四郎	尾崎茂	中島正則	新郷久巳	渡邊滿	山本則光	武富三郎	市成正一	崎山清光	石田清太郎	前手忠一	藏富士雄二	川口孝義
同	北海道	秋田	北海道	秋田	秋田	三重	富山	佐賀	愛媛	長崎	佐賀	同	鹿兒島	同	富山	山口	香川

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	七、二〇
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
同	同	同	鳥羽	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	富山
濱口光男	矢野三千二	大竹榮	中村榮三	池永友次郎	船木光雄	高田正三	瀧口太一	大浦元行	森田平作	島義政	中村富男	羽長吉	唐澤親翁	青井正夫	小川外二	河内重弘	姫野長吉
和歌山	岐阜	靜岡	三重	同	同	同	同	同	同	富山	石川	富山	長野	同	富山	石川	富山

六七

八、一七	同	同	同	同	八、一四	八、九	八、七	同	八、六	八、五	八、四	八、二	八、一	同	七、三一	七、三〇	七、二七
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
兒島	同	佐賀	同	大島	富山	廣島	兒島	鹿兒島	佐賀	島根	弓削	函館	兒島	同	同	鹿兒島	廣島
杉本實藏	中村五郎	津川富雄	新開哲郎	白根一治	松本戸余司	藤谷太助	中野寛市	金中安雄	内田和夫	安部貢	花田義夫	山崎靜夫	平田尙忠	湊通次	柳田常道	高橋吉武	三堂數夫
兵庫	福岡	熊本	同	山口	富山	廣島	岡山	島根	佐賀	島根	愛媛	北海道	岡山	徳島	鹿兒島	宮崎	廣島

昭和七年

一、二、三一	一、二、一五	一、二、二三	一、二、二二	一、一、九	一、一、二	一、〇、二九	一、〇、二八	一、〇、二七	一、〇、二二	一、〇、三	九、一八	八、二六	八、二一	八、一八	
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	
弓削	兒島	鳥羽	粟島	大島	島根	鹿兒島	鳥羽	弓削	鹿兒島	廣島	富山	鹿兒島	弓削	大島	佐賀
松葉一秋	那須文雄	矢田才二	國時力	中谷是一	山本實次	和田正之	熊平敏彦	小江義一	山下金男	廣近久人	板倉定義	外山亥年	小林正天	西村寛	蒲池新平
兵庫	岡山	三重	香川	山口	島根	鹿兒島	靜岡	廣島	鹿兒島	廣島	富山	熊本	愛媛	山口	佐賀

六六







同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同  
島 島

川岡岩濱北各益山井大占近兼伊片粟中古平淵  
邊田崎田山務田村上塚部藤武藤山原島川野山  
佐丈真一重男黨房猛一良夫額泉治隆行五男一人

福同同同山鳥同同山佐廣愛熊廣島佐廣佐佐廣  
岡 口取 口賀島媛本島根賀島賀賀島

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 七二〇

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同  
削 島 島

萬卷松吉高岩菅阿松小佐本久小朝宮飯工塚宮  
代幡浦本倉田野部浦田藤木保林田武田藤忠善本  
平義正季重真嘉美郎實一秋郎隆正夫郎治善政  
雄雄一雄雄之嘉美郎實一秋郎隆正夫郎治善政

愛廣愛廣同同同同同同同同同同同同同同同同  
媛島媛島 媛山川庫 川口分 山口岡

七三

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 七二〇

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

同兒同同同同同同同同同同同同同同同同同同同  
島 根 島 羽

村渡廣西吉野淺田奧杉渡杉川西野裕深富小淺  
瀬邊瀬田岡崎生中川浦邊本村信倉茂輝津正庄郁  
久誠輝孝省一公儀勇松三良茂夫一雄治黨二二男

岡新島長同同島兵島三三東同三熊和歌愛靜兵鼓  
山瀉根崎 根庫根重重京 重本 山知岡庫庫卓

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 七二〇

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同  
島 島 兒 島

有山江石底高吉上岡古福木大鹽廣木佐太好辻  
永本島知押本村原野角森口西谷野林野野田垣  
新一郎己守一三秩明作夫男義實男義治郎毅秋

大兵佐同同同廣高廣岡德岡香和同同同同岡奈  
分庫賀 島知島山島山川 歌山 岡山良

七二



同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 七、二〇

四四四四四四四四四四四四四四四四四四四  
同同同同同大同同同同同同同同同同同同同同 廣島

大木三杉田秋井池城丸諸園小北望辻本熊園英朝  
千吉本中本上田野尾浦嘉田川村月英與本本田義將日  
里德男吉太保秋夫郎太郎夫勤男二男夫男夫夫三郎  
大 同 山 福 山 福 同 佐 同 廣 佐 同 同 廣 鳥 佐 福 大 同 廣  
阪 口 岡 口 岡 賀 島 賀 島 取 賀 岡 分 島

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 七、二〇

四四四四四四四四四四四四四四四四四四四  
同同同同同粟同同同同同同同同同同同同同同同 大島

七七 三樋山光橫田角山阿兒藤青石末幸石石源奧小  
好笠北山關村本田座林谷柳井永尾光村內濱卓  
壽春正虎雪正人清滿一馬勳治郎夫治夫七男勝人二  
同同香德香同同山福同山福東同同同同同山島  
川島川口岡口岡京同同同同同同同同同同同同同同同 島根

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 七、二〇

四四四四四四四四四四四四四四四四四四四  
島同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 鳥羽

酒鶴小田中岡金梶江岡香古上福山松北瀬小中  
井田島山井森子原尻田月賀村與路林吉野山村  
雄良明正春寬義人美政一郎男雄一吾敏群平喜滿茂  
介衛正春寬義人美政一郎男雄一吾敏群平喜滿茂  
鳥愛福福同三長佐福愛同佐三靜三佐奈京同和  
取知岡島重野賀島知賀重岡重賀良都 歌山

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 七、二〇

四四四四四四四四四四四四四四四四四四四  
同同同同同廣同同同同同同同同同同同同同同同 島根

高平池江高山橫井首吉千山石勝荒上永三菅若  
橋田藤橋本林上藤岡原田橋矢川正正達浦野林  
六一潔夫男六次祐郎令二之夫夫道八男芳六甫雄  
同同廣山廣愛同岡大岡同同同同同同同同同同同 島根

七六



同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 一〇、一〇  
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五  
同同同大同同同同同同同同同同同同同同同同 廣  
島  
井井井吉田遠田岡小大與中田光高福大栗淵金  
上上原岡中藤中市崎林成村林陸耕家橋田多栖野丸  
松直溫雨一吉郎五明治眞三夫雄初太郎彦長巖夫  
雄人溫雨一吉郎五明治眞三夫雄初太郎彦長巖夫  
福山廣山青岩北同同同廣熊廣北同同同同同佐廣  
岡口島口森手海道同同同島本島海道同同同同同賀島

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 一〇、一〇  
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五  
同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同 大  
島  
丸喜土井植西松齋乃嶋山上藏眞柴中大大內藤濱  
尾田井澤松田野藤村田本上田本井田正昇一純富田敏  
一岩清通數辰繁一市智雄市樹郎弘澄行一郎滿三雄  
男光二夫義一市同同同同同同同同同同同同同同同 山  
同香和德同同同同同同同同同同同同同同同同 口  
同川歌山島同同同同同同同同同同同同同同同同 口

八一

同同同同同同同同同同 一〇、一〇  
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五  
同同同同同同同同同同 鳥廣大島同同富大鹿弓  
羽島島島根同同山島兒削  
松佐奧山山上水浦木花西江森浦杉前關  
原藤田崎野野谷村田村本田沅竹利治野谷  
成作邦一篤夫學秋雄猛夫郎弘雄直男邦三  
式一壯二夫學秋雄猛夫郎弘雄直男邦三  
愛同三佐同三佐三佐同鳥富石富山鹿愛  
知重賀重賀重賀重賀根山川山口兒媛

同同同同同同同同同同 一〇、一〇  
五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五五  
同同同同同同同同同同 鳥  
島  
元皆檜松金山前清水白橫柴渡木淺野植山鈴淺吉  
岡元山田本崎島水神溝田邊下野村松科木井田  
高泰政幸順敦三福勝秋金城郎郎造一三司安新晃  
夫藏美典一男郎男毅平實城郎郎造一三司安新晃  
同同同同廣同同同同同岡廣岡佐秋三岐北岐福熊  
同同同同島同同同同同山島山賀田重重阜道阜岡本

八〇

昭 和 十 年  
一、一〇  
二、五  
二、三  
三、一六  
三、一九  
三、二四  
五、一三  
六、二七  
一〇、七  
一〇、一〇

一〇、一〇

同	一〇、一〇	一〇、一〇	一〇、一〇	一〇、一〇	九、一〇	九、一〇	同	五、一五	四、二七	四、二三	四、一九	四、一八	四、一七	四、一七	三、三一	一〇、二〇	一〇、二六
六	六	六	六	五	五	四	五	五	四	五	五	五	五	五	五	五	五
同	富山	大島	鳥羽	鹿兒島	廣島	兒島	大島	弓削	大島	鹿兒島	弓削	鳥羽	弓削	同	鳥羽	鳥羽	廣島
中	朝倉昌俊	吉野谷義德	大森研一	横山茂樹	今村甚三郎	川口武	川本健兒	出海良雄	藤田了	藤本勝巳	八塚秀夫	濱崎健三	田中勝高	吉原保行	佐々木英一	白橋長治	丸尾爲雄
石川	富山	北海道	愛知	鹿兒島	青森	岡山	福岡	愛媛	山口	佐賀	愛媛	新潟	愛媛	福岡	愛知	静岡	廣島

昭和十一年

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	一〇、一〇	
六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	六	
同	同	同	同	同	同	同	同	鳥羽	同	同	同	同	同	同	同	同	同	富山	
大森秀夫	村上	大藏敏夫	玉置景治	山田將治	近藤辰郎	關啓八	三輪忠平	和田道夫	關重信	八木安次郎	片岡全之助	真木甚策	河村得順	前田正直	中村義正	竹島已次郎	新町宗治	國納晉吉	
愛知	島	分	重	川	石	靜	秋	田	同	岐	富	石	同	同	同	同	富	石	富

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	一〇、一〇
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	弓削
瀬戸口靜熊	石神正男	田平清英	村田敏道	田中政次	川崎哲夫	中村秀則	兒玉隆哉	小島一眞	岡井禮	村田俊作	菊池宗夫	黒田茂信	山口善壘	兵頭章	三好勇	佐伯大藏	芝田博	池田定正	中川石雄	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	愛媛

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	一〇、一〇
一〇、一九	一〇、一八	同	一〇、一七	一〇、一五	同	一〇、一四	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
兒島	鳥羽	廣島	兒島	鳥羽	粟島	大島	廣島	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	鹿兒島
金子	永井茂夫	增金豊二	塚越正士	井村淳吾	三好重彦	河内真助	新田早苗	山口大四郎	山田俊彦	上原晋一	山内敬三	有川政治	鬼塚成男	片山利久	山崎徳光	大村公徳	外山繁	池田芳彦	菅蒲谷廣	鹿兒島	
静岡	和歌山	廣島	埼玉	三重	香川	山口	廣島	鹿兒島	佐賀	同	同	同	鹿兒島	佐賀	熊本	同	同	同	同	同	鹿兒島



一〇、一〇  
 同  
 六  
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 鹿兒島 同 同 同 同 同 同 同 同 粟島  
 上 山 井 高 馬 外 橋 脇 鬼 長 時 鎌 矢 谷 工 河 岡 竹 林 三ヶ島  
 釜 本 手 元 場 蘭 口 黒丸 塚 濱 吉 田 野 本 藤 野 田 中 柄 喜 勇 起  
 孝 雄 男 綱 二 魁 藏 夫 臣 操 七 賀 榮 義 一 一 良 喜 勇 起  
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 鹿兒島 廣 愛 廣 愛 廣 岡 同 德 福  
 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 鹿兒島 島 媛 島 知 島 山 島 島 岡

一〇、一〇  
 同 同 一〇、二〇 同 一〇、一九 一〇、一四 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
 六 鹿兒島  
 弓 同 廣 粟 鹿 大 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 鹿兒島  
 削 島 島 島 島  
 神 福 竹 佐 出 增 前 藤 藤 濱 村 木 小 木 上 猿 平 松 永 中  
 林 島 崎 伯 石 本 田 野 野 村 村 出 場 山 渡 野 原 野 原 原 原  
 正 晴 逸 義 貫 義 耕 政 政 敏 村 達 隼 布 俊 健 傳 正 正 匡  
 義 旭 郎 雄 二 孝 作 圓 一 異 矢 茂 嗣 人 男 夫 兒 一 六 六 匡  
 同 鹿兒島  
 同 鹿兒島  
 同 鹿兒島

八五

一〇、一〇  
 同  
 六  
 大 同 同 同 同 同 同 同 同 廣 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 鳥  
 島  
 長 佐 大 雲 大 田 松 廣 木 宇 福 尾 古 三 田 大 日 市 鈴 竹  
 見 伯 川 野 隈 中 山 原 野 家 崎 市 宅 口 森 笠 江 木 內  
 岩 守 篤 明 次 郎 武 平 一 二 也 吉 造 實 一 郎 雄 治 雄 末 清  
 夫 守 篤 明 次 郎 武 平 一 二 也 吉 造 實 一 郎 雄 治 雄 末 清  
 山 廣 佐 熊 佐 長 同 同 廣 同 岡 和 同 同 同 同 同 同 同 同 愛 三  
 口 島 賀 本 賀 崎 島 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 知 重

一〇、一〇  
 同  
 六 大  
 同 同 同 粟 同 同 大 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 大  
 島  
 大 近 安 今 木 石 後 原 潮 大 柄 吉 石 高 齋 三 原 山 岡 安  
 西 本 藤 川 下 井 藤 利 德 下 澤 田 橋 須 藤 好 田 西 崎 尾  
 弘 孝 久 彦 郎 一 司 男 男 男 雄 正 正 正 一郎 滿 雄 清 市 幸  
 同 同 同 香 北 山 宮 山 鳥 山 北 同 福 福 青 北 同 同 同 同 同 同 同 山  
 同 同 同 川 海道 口 城 口 取 口 海道 岡 岡 森 海道 同 同 同 同 同 同 同 口

八四









同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 一〇、  
一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇  
同 同 同 同 弓 同 同 同 同 同 同 同 同 栗 同 同 同 廣  
同 同 同 同 削 同 同 同 同 同 同 同 同 島 同 同 島  
富 木 金 都 宗 合 松 德 佐 岩 石 森 河 瀧 津 田 谷 底  
永 和 久 井 政 田 岡 重 々 田 川 川 野 口 村 中 中 押  
通 田 利 信 善 弘 迅 光 木 文 久 忠 龍 一 正 男 洋 智  
同 愛 廣 同 岡 同 同 香 德 香 同 同 同 香 廣 兵 同 廣  
同 媛 島 山 同 同 川 島 川 同 同 川 島 庫 島

同 同 同 同 同 同 一〇、  
一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇  
同 同 同 同 兒 同 弓  
同 同 同 同 島 削  
白 三 阿 藤 森 下 折  
神 戶 部 田 本 司 戶  
豐 一 澄 武 貢 正  
士 之 護 夫 岡 京 治  
岡 山 岡 同 岡 都 神  
山 口 山 山 都 奈  
山 口 山 山 川

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 一〇、  
一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇  
同 同 同 同 大 同 同 同 同 同 同 同 鳥 同 同 同 同 富  
同 同 同 同 島 同 同 同 同 同 同 同 羽 同 同 同 山  
兼 平 濱 和 高 川 吉 鳥 岩 伊 中 小 各 高 若 丹 中 森  
安 野 崎 田 木 北 木 居 永 藤 森 小 務 本 林 羽 田 岡  
金 繁 英 哲 木 正 照 敏 茂 廣 野 正 與 功 重 清  
治 雄 倫 次 茂 夫 明 男 雄 己 夫 司 郎 功 實 信 一  
山 福 熊 同 山 三 大 京 北 同 三 愛 岐 同 同 同 富  
口 岡 本 同 口 重 阪 都 海 道 重 知 阜 同 同 山

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 一〇、  
一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇 一〇  
同 同 同 廣 同 同 同 同 同 同 同 同 同 鹿 同 同 同 同 大  
同 同 同 島 同 同 同 同 同 同 同 同 同 兒 同 同 同 同 島  
田 倉 藤 向 平 白 九 內 高 濱 入 山 本 安 山 藤 前 田  
丸 岡 谷 田 田 坂 二 村 田 田 來 下 村 永 本 岡 田 村  
四 金 修 田 田 兼 靜 光 滿 滿 院 春 軍 政 茂 勉 青 元  
郎 司 壯 信 雄 男 吉 明 夫 夫 重 季 藏 利 樹 勉 穗 彦  
同 同 同 廣 同 同 同 同 同 同 同 同 同 鹿 福 同 同 同 山  
同 同 同 島 同 同 同 同 同 同 同 同 同 兒 岡 同 同 同 口

## 二、本年度記事 (自昭和十四年十月二日至昭和十五年十月二日)

### (一) 練習船ノ動靜

#### (1) 航海統計

要項	船別			
	日	本丸	海	王丸
第二十一次	昭和十四年十二月二日	昭和十五年五月二十九日	昭和十四年十二月二日	昭和十五年五月二十九日
發航年月日	昭和十五年二月二十一日	昭和十五年九月十四日	昭和十五年二月二十一日	昭和十五年九月十四日
歸航年月日	昭和十五年二月二十一日	昭和十五年九月十四日	昭和十五年二月二十一日	昭和十五年九月十四日
總航海日數	八二日	一〇九日	八二日	一〇九日
帆走日時	五〇日一時九分	七三日六時五十分	五一日九時四十分	七五日九時三六分
帆走距離	五九〇二浬	五五二〇浬	六〇三一浬	五六二二三浬
機走日時	一日一四時五十六分	二日一時一九分	一日八時五十九分	一日一時五十四分
機走距離	二九七浬	二三〇〇浬	二六三浬	二一三四浬

寄港番	乗組員		
	職員	生徒	普通海員
横濱、ボナベ島、トラツク島、テニアン島、鳥羽	一四名	五七名	四〇名
タワオ、榆林、厦門、青島、横濱	一四名	四七名	四一名
横濱、クサイ島、トラツク島、サイパン島、鳥羽	一四名	四八名	四一名
タワオ、榆林、厦門、青島、横濱	一三名	三五名	四一名

備考 右航海ノ外日本丸及海王丸ハ共ニ紀元二千六百年記念航海トシテ關西、九州方面ヘ一航海(航海日數

二七日、航程日本丸一七八二浬、海王丸一八〇〇浬)及昭和十五年度第一次短期航海トシテ横須賀ヘ

一航海(航海日數一日、航程兩船共三八浬)就航セリ

#### (2) 航海記事

##### ○日本丸第二十一次航海

昭和十四年十二月二日僚船海王丸ト共ニ東京港ヲ發シ横濱港ニ回航淺野船渠ニ於テ船底塗換ヲナス、同九日横濱解纜ボナベ島ニ直航ス。海王丸ト編隊ニテ東京灣ヲ南下シ野島埼沖ヨリ帆走ヲ開始折柄ノ偏南風ニ駕シ東進爾後偏西乃至北西ノ強風ニ惠マレ十二日ニハ早クモ東經一五〇度ヲ突破セリ、此間十二、三節ノ快速ヲ得タルコト數回ニ及ビタリ、其後引續キ順調ニ航走シクサイ島附近洋上ニ於テ昭和十五年元旦ヲ迎ヘ四日ボナベ島ニ入港セリ。ボナベ島ニ於テハナンマタルノ遺跡見學ヲ始メ農場事業地等ノ發展振リヲ具サニ見聞シ得ル處大ナルモノアリ。

リタリ。

一月十一日ボナベ島ヲ出帆トラツク島ニ向フ、港口裾礁外ニ出ヅルヤ直チニ解帆、機走僅カニシテ帆走ヲ開始恒風ニ連日快走ヲ續ケ十四日無事トラツク島ニ安着セリ。トラツク島ニ於テハ先着セル僚船海王丸ト同一行動ヲナシ端艇ノ帆走撓走練習等ヲナシタル外在留官民ト武道體育等ヲ通ジ交歡ヲ遂ゲ頗ル有意義ナル碇泊ヲナセリ。

一月二十二日早朝海王丸ト共ニトラツク島ヲ發シ本ハテニアン島ニ向フ、以來北東恒風ニヨリ航走ヲ續ケ二十七日帆走ノ儘テニアン水道ニ入進無事テニアン島ニ到着セリ。此區間ニ於テサイパン島ニ向フ僚船海王丸ヲ連日水平線上ニ望見シツ、航走セリ。三日間ノ碇泊ニ於テ農場及製糖所ノ見學ト在留民トノ交歡ニ充分ナル成果ヲ收メタリ。

一月三十日テニアン島拔錨鳥羽港ニ向フ、回頭後直チニ展帆同日夜半以來北京強風吹來シ一氣ニ北上スルヲ得二月二日ニハ北章二〇度ヲ突破セリ、爾後更ニ北上ノ機ヲ得タルモ永續セズ七日以來偏北西季節風連日強吹シタル爲己ムナク西走ヲ續ケタルモ十二日早朝漸ク偏南風吹來シタルヲ以テ極メテ順調ニ北上スルヲ得十五日ニハ熊野灘ニ入進同夜半ヨリ機走ニ移リ十六日鳥羽港ニ入港セリ。鳥羽港ニ於テハ再ビ海王丸ト相會シ兩船同一行動ニヨリ伊勢神宮參拜ヲ始メ鳥羽商船學校訪問ノ上教職員生徒トノ交歡ヲ行フ外碇泊中船内ヲ公開シ多數ノ參觀者アリタリ。二月十九日鳥羽港ヲ發シ橫濱港ニ向フ、菅島水道通過後帆走ニ移ル、夕刻ニ至リ偏南西風ヲ受ケ遠州灘ヲ快走ス、劍埼附近ニテ收帆機走ニ移リ二十日夕刻橫濱檢疫錨地ニ到着翌二十一日早朝入港諸手續終了ノ上東京

港ニ歸航シ茲ニ無事第二十一次航海ヲ完了セリ。

本航海ハ第十期生初期ノ航海ニシテ各區間共學習可能日數比較的僅少ナリシモ氣候極メテ溫和ニシテ學習ニ適シ技能練磨ニ充分其ノ目的ヲ達シタリ。

### ○海王丸第二十一次航海

昭和十四年十二月二日僚船日本丸ト共ニ東京港ヲ發シ橫濱港ニ回航淺野船渠ニ於テ船底塗換ヲナス、同九日橫濱港出帆クサイ島ニ向フ。日本丸ト舳艫相銜ミ東京灣ヲ南下シ野島崎沖ニ於テ總帆ヲ展シ東航ヲ開始セリ、爾來適風ニ惠マレ連日快走ヲ續ケ十八日ニハ北緯三二度東經一六四度ノ地點ニ達セリ、其後モ概ネ適風ヲ得テ一月四日無事クサイ島ニ到着セリ。碇泊五日間タオンサツク瀧見學ヲ始メ在留官民トノ交歡ヲナシタリ。

一月九日クサイ島出帆トラツク島ニ向フ、機走僅カニ三漕ノ後帆走ニ移リ恒風ニ駕シ一氣ニ走破十四日トラツク島ニ到着セリ。トラツク島ニ於テハ僚船日本丸ト同一行動ヲナス。

一月二十二日早朝日本丸ト共ニトラツク島ヲ發シ本船ハサイパン島ニ向フ、好晴ニ加フルニ恒風定吹シ二十七日無事サイパン島ニ入港セリ。同島ニ於テハ諸方ノ見學ヲナシタル外在留民トノ交歡ヲ行フ。

一月三十一日サイパン島ヲ發シ鳥羽港ニ向フ、北東ノ雄風ヲ利用シ展帆拔錨シ連日恒風強吹シ二月三日ニハ北緯二二度東經一三九度ノ位置ニ達シタリ、此間ノ平均速力七・二八節ナリ、其後風速ニ多少ノ消長アリタルモ概シテ順調ニ航續シ、四日潮岬沖通過十六日無事鳥羽港ニ入港セリ。鳥羽港ニ於テ再ビ日本丸ト相會シ兩船同一行



動ヲナス。

二月十九日日本丸ト共ニ鳥羽港ヲ發シ横濱港ニ向フ、菅島燈臺通過後帆走ヲ開始シ一不連續線ノ影響ニ依リ適風ニ恵マレ且ツ黒潮ニヨリ所期以上ノ帆走成績ヲ以テ順走劍埼附近ニ於テ機走ニ移リ二十日夕刻横濱港外着翌二十一日早朝入港手續終了ノ上東京港ニ歸航シ茲ニ無事第二十一次航海ヲ完了セリ。

本航海ハ第十期生初期ノ航海トシテ生徒何レモ緊張シ各區間共學習可能日數比較的僅少ナリシモ氣候適順ニシテ學習ニ適シ技能練成ニ充分其ノ目的ヲ達シ得タリ。

### ○日本丸紀元二千六百年記念航海

今航海ハ紀元二千六百年記念トシテ聖地巡航ヲ兼ネ海事思想普及ノ爲海軍協會及朝日新聞社共同主催ニナル全國小學校教員聖地巡航海上訓練團員約四百名ヲ四回ニ分ケ兩船ニ便乗セシメ兩船編隊ヲ以テ昭和十五年三月二十日東京港ヲ發シ横須賀、名古屋、鳥羽ヲ經テ大阪へ、更ニ大阪ヨリ吳、江田島ヲ經テ油津ニ至ル往復四區間ノ航海ニ就航四月十五日東京歸着本航海ヲ完了セリ。

而シテ本航海ニ於テハ練習生ニ對シテハ特ニ沿岸航法ニ習熟セシムル機會ヲ與ヘ且ツ訓練團員ト共ニ聖地參拜ヲナサシメ其他軍港見學ニ時局講演ニ充分ナル成果ヲ收メタル一方全國各地ヨリ集レル小學校教職員ニ對シテハ練習船教育ノ一端ヲ體驗セシメテ海事思想普及ニ資シ極メテ意義アル記念航海ヲ施行シタル次第ナリ。

### ○日本丸第二十二次航海

今航海ハ兩練習船同一日程ニ依リ寄港地ニ發着シ且ツ航海中ハ可成編隊航行ヲナシ緊密ナル連絡ノモトニ充分ナル練習効果ヲ收メント計畫實施サレタルモノナリ。

昭和十五年五月二十九日兩船芝浦岸壁ヲ解纜シ日本丸先頭トナリ海王丸コレニ續キ兩船編隊ヲ以テタワオ港ニ向フ。夕刻觀音崎沖ニ假泊シ黎明ヲ待ツ、翌三十日早朝拔錨直チニ展帆帆走ヲ開始ス、夕刻野島崎南方ヲ航過シ外洋ニ出テタリ、其後一小低氣壓ノ影響ニ依リ偏南風ノ爲南下困難トナリ縫航數次ニ及ビ加フルニ屢々濃霧發生シ航海頗ル難澁セリ。

爾來適風ニ恵マルルコト少ナク機走數回ニ及ビ海王丸ハ二十九日日本丸ハ三十日漸ク「セレベス」海ニ入進シ約三週間振リニテ兩船相並ビテ帆走ヲ試ミタルモ連日風向不定風力亦微弱ニシテ船脚遅々タリ、而シテ七月三日夜半ヨリ機走ヲ始め一路タワオ港ニ向針五日目的地ニ到着セリ。タワオ港ニ於テハ邦人經營ノ椰子園、護謨園、マニラ麻園等ノ南方資源開發ノ實狀ヲ具サニ見學スルヲ得タル外同地ニ活躍中ノ同胞トノ交歡等ニ極メテ有意義ナル碇泊ヲナセリ。

七月十一日タワオ港拔錨海南島榆林ニ向フ、同日午後ニ至リ偏南和風吹起セルヲ以テ帆走ヲ開始シ順潮ト相俟ツテ順走スールー海ニ入ル、スールー海ニ入りテヨリ引續キ偏南風ニ恵マレ點在セル淺堆島嶼ヲ避航シツツ航走シ十五日機走ヲ以テバラバツク海峡通過南支那海ニ入り再ビ帆走ニ移ル、而シテバラワン航路筋ニ入りテヨリ連

日偏西及偏南風アリシモ天候陰曇ノ爲船位決定ニ困難ヲ感ジタルコトアリ特ニ惡性强スコール及強海流ノ爲一時機走ナドナシタルコトアリシモ其後概ネ適風ニヨリ航走ヲ續ケ二十六日目的港榆林ニ到着セリ、榆林碇泊中ニ於テハ皇軍奮戰ノ生々シキ跡ヲ見學シ皇軍將士ノ勞苦ノ實狀ヲ見聞シテ時局認認ヲ更ニ深メタリ。

七月三十日榆林港拔錨廈門港ニ向フ、港外ヨリ帆走ニ移リ南西季節風ニ駕シ連日快走ヲ續ケ四日夜半早クモ廈門港東方東椀島燈臺附近ニ達シ其後機走ニ移リ翌五日兩船相前後シテ廈門港外港ニ投錨ス、廈門港碇泊中ハ連日好晴ニ惠マレ廈門島戰跡並鼓浪嶼ノ見學等ニ充分ナル成果ヲ收メタリ。

八月十日廈門港拔錨青島ニ向フ、海王丸先航シ日本丸コレニ續ク、東椀島燈臺沖合ヨリ帆走ヲ開始シ南支沿岸ニ沿ヒツツ臺灣海峽ヲ北上ス、爾來連日好天ニ惠マレツツ偏南ノ順風ニ平穩ナル航海ヲ續ケ青島港至近迄帆走ヲナスコトヲ得テ二十三日青島ニ入港セリ。青島ニ於テハ戰跡ヲ始メ屠獸所、紡績工場等ヲ見學ナシタル外同地邦人ト武道試合ヲ行ヒ且ツ出港當日在留官民ヲ海王丸ニ乗セ港外ニ於テ日本丸ノ操帆諸訓練ヲ見學セシメ練習船教育ノ一端ヲ披露シタリ。

八月二十九日青島ヲ發シ橫濱港向フ歸航ノ途ニツク、朝連島附近ニ於テ帆走ニ移ル、然ル處九月一日夜半ヨリ一颯風ノ影響ノ爲天候次第ニ險惡トナリ一時風力強烈トナリ五日夜半ノ如キ激烈ナル猛雨電光雷鳴等アリタル後翌六日ニ至リ漸ク天候回復東走ヲ續ケ得タリ、九月八日屋久島附近ニ於テ風風ギ潮流ノ爲操船困難トナリタルニヨリ機走ヲ以テ太平洋ニ向ヒタリ、然ルニ日本丸一生徒急病ノ爲至急入院加療ノ要アリシ爲兩船ノ編隊ヲ解キ海

王丸ハ豫定ノ航行ヲ續ケ日本丸ハ鹿兒島ニ急行翌九日鹿兒島ニ於テ同生徒ヲ上陸送院ノ上直チニ拔錨南下豫定ノ航海ニ復シタリ、而シテ日本丸ハ九日夜半ヨリ中心示度七二〇耗程度ノ颯風ノ影響圓内ニ入りタルヲ以テ種子島北東方海上ニ於テ漂躪ヲ開始ス、十日午後十時最低氣壓七二九五耗最大風力一二ノ算シ海水上甲板ニ奔騰船體ノ激動熾烈ナルモノアリテ荒天用帆ノ數枚ハ千々ニ破損シタリ、而シテ同夜半ヨリ風位南變氣壓急昇シテ天候次第ニ回復シタルヲ以テ東北東ニ執針漸次増帆航走ス、其後偏南風ニ快走ヲ續ケタルモ十三日夜半紀州沖合ニテ風力衰微シタルヲ以テ機走ニ移リ十四日東京海灣ニ入進橫濱ニ於テ檢疫手續ヲナシ午後品川定繫地ニ無事歸航茲ニ第二十二次航海ヲ完了セリ。

一方海王丸ニ於テハ編隊ヲ解キタル後豫定ノ航海ヲ續航中八日夜半ヨリ風力次第ニ増大シ氣壓ノ下降甚ダシク天候惡化ノ兆アリタルヲ以テ夕刻ヨリ漂躪ヲ開始シ風位ノ變轉ヲ待ツ、然ルニ氣壓ハ愈々降下激シク風浪モ又強大トナリシニ十日午前十一時二十分ニ至リ風力急激ニ弱マリ雲間ヨリ太陽現レ鳥類ノ飛交ヲ認メ颯風ノ中心ニ入りシヲ察知シタリ。

茲ニ於テ更ニ荒天準備ヲ強化シ諸般ニ備ヘタル處午後三時五十分南風強吹シ風浪再ビ激シク氣壓最低七一・六・五耗ヲ示シ風力最大十二以上ニ達シ狂亂濤濤實ニ物凄ク船體ノ動搖激烈ニシテ左右合計七五度ニ達シタリ、此ノ間ニ於テ主要帆數枚ヲ失ヘ又救命艇一隻ヲ大破、一隻ヲ失ヘ誠ニ稀有ノ暴風雨タリシナリ。コレガ通過後ハ風力次第ニ收マリテ偏南ノ順風トナリタルヲ以テ機關ヲ使用シ一路橫濱向ケ航行ヲ續ケタリ。

十三日早朝劍崎燈臺通過東京海灣ニ入進同夜半橫濱檢疫錨地ニ到着翌朝諸手續完了午後東京港ニ歸着シ茲ニ第二十二次航海ヲ完了セリ本航海ハ從來ニ類例ナキ方面ノ航海ニシテ戰跡訪問ノ機多ク各員ノ時局認識ヲ深メシメ航海ノ最終區間ニ於テハ猛烈ナル颶風ニ遭遇シ且ツ島嶼淺堆多ク加フルニ強海流ノ流帶ニ沿フ航海ニシテ頗ル困難ナルモノアリシモ第十期生最後ノ練習航海トシテ其ノ成果頗ル大ナルモノアリタリ。

(3) 見學並講演

○日本丸

昭和十四年

十月 四日 宮城並明治神宮參拜 (兩船共)

同 二十日 靖國神社參拜 (同右)

同 二十五日 講演 (於海王丸)

十一月十五日 日光方面行軍 (兩船共)

十二月五日 燈臺局見學 (同右)

昭和十五年

一月 六日 講演 南洋ボナベ事情

同 七、八日 ナンマタル遺跡「マタラニユーム」南洋興發會社事業地、常盤瀧等見學

東京高等商船學校教授 北川次郎氏

ボナベ支廳長 羽山吉藏氏

同 十八日 講演 南洋並トラック事情 (兩船共) トラック支廳庶務係長 片桐榮一郎氏

同 二十日 南興水産工場見學 (於トラック) (同右)

同 二十八日 南洋興發株式會社テニアン製糖工場及テニアン農場一圓見學 (於テニアン)

三月二十日 橫須賀軍港見學 (兩船共)

同 二十二日 熱田神宮參拜 (同右)

同 二十三日 名古屋市内見學 (同)

同 二十三日 講演 歸還一兵士ノ戰線物語 大阪朝日新聞社員 山北清治氏

同 二十四日 伊勢神宮參拜 (兩船共)

同 御木本眞珠製精工場見學 (同)

講演 實戰體驗談 (同) 海軍協會囑託海軍少佐 田口彌三松氏

同 二十六日 大阪朝日新聞社見學 (兩船共)

同 樞原神宮並畝傍御陵參拜 (同)

同 二十九日 吳軍港見學 (同)

同 江田島海軍兵學校見學 (同)

同 三十日 嚴島神社參拜 (同)

同 三十一日 講演 海ノ話

海軍大佐 永野 雅信氏

戰線銃後ヲ貫ク力

大阪朝日新聞社員 小野 直氏

四月 一日 鶴戸神宮並宮崎神宮參拜(兩船共)

同 十六日 郵船新田丸見學(於橫濱) (同)

同 二十五日 靖國神社參拜 (同)

五月 七日 水路部及船舶試驗所月島試驗室見學

七月 六、七日 タワオ附近護謨園、椰子園マニラ麻園見學(於英領ボルネオ、タワオ) (兩船共)

講演 植民地トシテノ北ボルネオ

日產護謨取締役 前田 惟智氏

「ボルネオ」ノ水産

ボルネオ水産取締役 折田 一二氏

八月二十五、六日 戰跡見學(於青島) (兩船共)

同 二十七日 青島工廠(浦賀船渠經營)、屠獸場、日本紡績工場、山東省產業館、東亞蠶業公司(同)

講演 青島港修築計畫(於海王丸)

青島埠頭會社專務 中川 四郎氏

同 海上生活ノ經驗談(同)

同會社營業部次長 森 勝衛氏

九月二十三日 宮城並明治神宮參拜(兩船共)

○海王丸

昭和十五年

一月五日 講演 南洋並クサイ島民事情

國場 警部補及西川 公學校長

同 六日 タホンサツク瀧見學(於クサイ)

公學校學藝會 (同)

同 三十日 南洋興發會社製糖工場タビオカ澱粉會社工場見學(於サイパン)

講演 南洋サイパン事情

伊藤 財務係長

(二) 人事異動其他

昭和十四年

十月九日 第十回入所式舉行

同 二十六日 技師小野奈良治兼任文部省督學官

同 三十日 技師小野奈良治兼任遞信局技師並地方海員審判所審判官

十一月六日 技手荒川文雄鹿兒島商船學校教諭ニ任セラレ

技手勝田勝郎海王丸機關長ヲ命ス

同 三十日 下間公二臨時海王丸船醫ヲ囑託ス  
十二月一日 上村三夫臨時海王丸一等機關士ヲ囑託ス  
同 十一日 木原敏二郎依願免本官

昭和十五年

二月二十四日 上村三夫臨時海王丸一等機關士囑託ヲ解ク

三月 七日 杉浦キミ雇ヲ解ク

同 十三日 西田一男依願解囑

同 十九日 富山商船學校教諭小口義彦臨時海王丸機關長ヲ囑託ス

鳥羽商船學校助教諭谷口英雄臨時海王丸一等機關士ヲ囑託ス

四月十二日 柄澤佐喜子雇ヲ命ス

同 十五日 航海練習所長岩松五良關東局在滿教務部長ニ任セラル

實業學務局長關口勳航海練習所長ニ補ス

同 十六日 小口義彦臨時海王丸機關長囑託ヲ解ク

谷口英雄臨時海王丸一等機關士囑託ヲ解ク

同 十八日 文部書記官鈴木榮二航海練習所事務囑託ヲ解ク

同 三十日 文部書記官西崎惠航海練習所事務ヲ囑託ス

長田貢依願解雇

五月 四日 高橋茂航海練習所技術ヲ囑託ス、海王丸三等運轉士ヲ命ス

同 十五日 雇片山定九、海王丸二等機關士ヲ免シ、海王丸一等機關士ヲ命ス

吉田利八雇ヲ命ス、海王丸二等機關士ヲ命ス

同 十八日 金山弘航海練習所技術ヲ囑託ス、日本丸三等運轉士ヲ命ス

同 二十日 今村茂一郎臨時日本丸二等運轉士囑託ヲ解キ、航海練習所技術ヲ囑託ス、日本丸二等運轉士ヲ

命ス

同 二十五日 上杉宇榮光依願解囑

牧野忠八依願解囑

鳥羽商船學校助教諭中村嘉六臨時海王丸三等運轉士ヲ囑託ス

同 二十七日 岩松了臨時日本丸一等機關士ヲ囑託ス

七月 一日 赤城三千練習船ニ關スル調査ヲ囑託ス

九月二十一日 第十一期生横須賀ニ於テ乗船ス

同 三十日 赤城三千依願解囑

297  
79

昭和拾六年八月貳六日

製本控

冊	1
日	10月
月	10
年	昭和14年
號	79
函	297
備考	航海練習所要覽 (昭和14年) 10月1日至15日 航海練習所編

昭和十六年三月廿七日印刷  
昭和十六年三月卅一日發行  
〔非賣品〕

航海練習所

電話文部省內三五五

印刷者 中村謹吾

東京市京橋區新富町三ノ一  
印刷所 中村精版印刷所  
電話築地55-1885

297  
79

終

